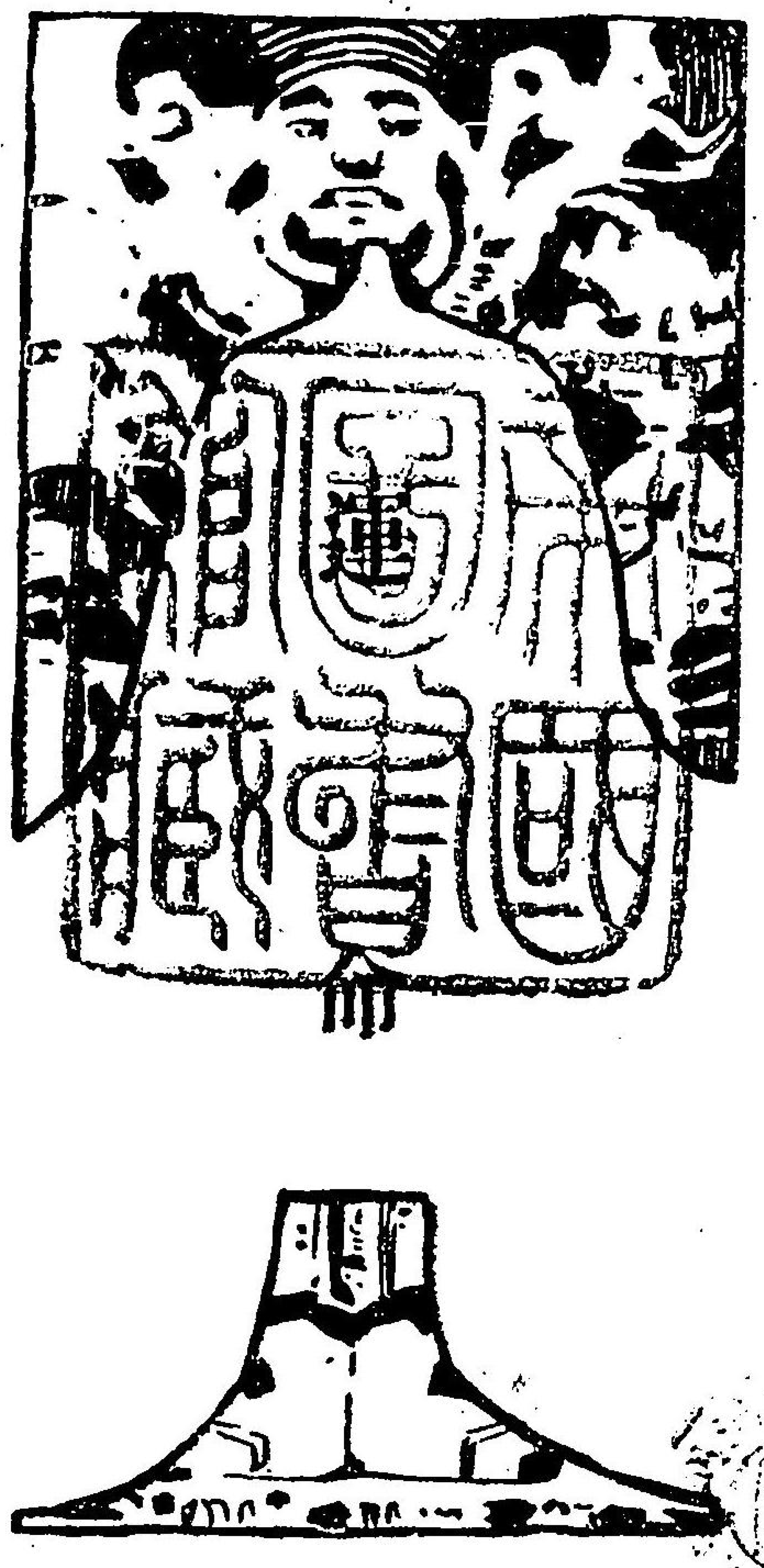
32-310



32-

運命目次

表紙畫　小杉未醒
口繪　滿谷國四郎

運命論者……一
巡査……四八
酒中日記……八〇
馬上の友……一三三
惡魔……一五八
畫の悲み……二一九
空知川の岸邊……二三一
非凡なる凡人……二五七
日の出……二七九

通計　九篇

運命

國木田獨歩

運命論者

（一）

秋の中過ぎて冬近くなると何れの海濱を問ず、大方は淋れて來る、鎌倉も其通りで、自分のやうに年中住んで居る者の外は、濱へ出て見ても、里の子、浦の子、地曳網の男、或は濱づたひに往通ふ行商を見るばかり、都人士らしい者の姿を見るは稀なのである。

或日自分は何時のやうに滑川の邊まで散歩して、さて砂山に登ると、思の外、北風

が身に沁ので直ぐ麓に下て其處ら日あたりの可い所、身體を伸して樂に書の讀めさうな所と四邊を見廻はしたが、思ふやうなところがないので、彼方彼方と探し歩いた、すると一個所、面白い場所を發見けた。

砂山が急に崩げて草の根で僅にこれを支へ、其下が崕のやうになつて居る、其根方に座つて兩足を投げ出すと、背は後の砂山に靠れ、右の臂は傍らの小高いところに懸り、恰度ソハに倚つたやうで、眞に心持の佳い場處である。

自分は持て來た小説を懐から出して心長閑に讀んで居ると、日は暖かに照り空は高く晴れ此處よりは海も見えず、人聲も聞えず、汀に轉がる波音の穏かに重々しく聞える外は四圍寂然として居るので、何時しか心を全然書籍に取られて了つた。

然にふと物音の爲たやうであるから何心なく頭を上げると、自分から四五間離れた處に人が立て居たのである。何時此處へ來て、何處から現はれたのか少も氣がつかなかつたので、恰も地の底から湧出たかのやうに思はれ、自分は驚いて能く見ると年齢

は三十ばかり、面長の鼻の高い男、背はすらりとした腰形、衣裝といひ品といひ、一見して別莊に來て居る人か、それとも旅宿を取つて滯留して居る紳士と知れた。

彼は其處につッ立つて自分の方を凝と見て居る其眼つきを見て自分は更に驚き且つ怪しんだ。敵を見る怒の眼か、それにしては力薄し。人を疑う猜忌の眼か、それにしては光鈍し。たゞ何心なく他を眺る眼にしては甚だ凄味を帶ぶ。

妙な奴だと自分も見返して居ること暫し、彼は忽ち眼を砂の上に轉じて、一歩一歩静かに歩きだした。されども此窪地の外に出やうとは仕ないで、たゞ其處らをブラブラ歩いて居る、そして時々凄い眼で自分の方を見る、一たいの樣子が尋常でないので、自分は心持が惡くなり、場所を變る積で其處を起ち、砂山の上まで來て、後を顧みると、如何だらう怪の男は早くも自分の座つて居た場處に身體を投げて居た！そして自分を見送つて居る筈が、さうでなく立た膝の上に腕組をして突伏して顏を腕の間に埋めて居た。

餘りの不思議さに自分は樣子を見てやる氣になつて、兎ある小蔭に枯草を敷て這ひつくばい、書を見ながら、折々頭を擧げて彼の男を覗つて居た。

彼はやゝ暫く顏を上なかつた。けれども十分とは自分を待さなかつた、彼の起あがるや病人の如く、何となく力なげてあつたが、起つたと思ふと其儘くるりと後向になつて、砂山の崕に面と向き、右の手で其麓を堀りはじめた。

取り出した物は大きな罎、彼は袂からハンケチを出して罎の砂を拂ひ、更に小な洋盃樣のものを出して、罎の栓を拔や、一盃一盃、三四杯續けさまに飮んだが、罎を靜かに下に置き、手に杯を持たまゝ、昂然と頭をあげて大空を眺めて居た。

そして又一杯飮んだ。そして端なく眼を自分の方へ轉じたと思ふと、洋杯を手にしたまゝ自分の方へ大股で歩いて來る、其步武の氣力ある樣は以前の樣子と全然違うて居た。

自分は驚いて逃げ出さうかと思つた。然し直ぐ思ひ返して其まゝ横になつて居ると、

彼は間もなく自分の傍まで來て、怪げな笑味を浮べながら

『貴樣は僕が今何を爲たか見て居たでせう？』

と言つた聲は少し嗄れて居た。

『見て居ました。』と自分は判然答へた。

『貴樣は他人の秘密を覗がうて可いと思ひますか。』と彼は益怪げな笑味を深くする。

『可いとは思ひません。』

『それなら何故僕の秘密を覗ひました。』

『僕は此處で書籍を讀むの自由を持て居ます。』

『それは別問題です。』と彼は一寸眼を自分の書籍の上に注いだ。

『別問題ではありません。貴樣が何にを爲やうと僕が何を爲やうと、それが他人に害を及ぼさぬ限りはお互の自由です。若し貴樣に秘密があるなら自から先づ秘密に爲た

ら可いでせう。』

彼は急にそは〱して左の手で頭の毛を採るやうに掻きながら、

『さうです、さうです。けれども彼れが僕の做し得るかぎりの秘密なんです。』と言つて暫らく言葉を途切し、氣を塞めて居たが、

『僕が貴様を責めたのは惡う御座いました、けれども何乎今御覧になつたことを秘密に仕て下さいませんかお願ひですが。』

『お頼とあれば秘密にします。別に僕の關したことではありませんから。』

『難有う御座います。それで僕も安心しました。イヤ眞に失禮しました匆卒貴様を詰めまして……』と彼は人を壓つけやうとする最初の氣勢とは打て變り、如何にも力なげに詫たのを見て、自分も氣の毒になり、

『何もさう謝るには及びません、僕も實は貴様が先刻僕の前に佇立つて僕ばかり見て居た時の風が何となく怪がつたから、それで此處へ來て貴様の爲ることを覗がうて居たのです。矢張貴様を覗がつたのです。けれども彼の事が貴様の秘密とあれば、堅く僕は其秘密を守りますから御安心なさい。』

彼は默つて自分の顏を見て居たが、

『貴様は必定守つて下さる方です。』と聲をふるはし、

『如何でしよう、一つ僕の杯を受けて下さいませんか。』

『酒ですか、酒なら僕は飲ないはうが可いのです。』

『飲まないはうが！飲まないはうが！無論さうです。もう飲まないで濟むことなら僕とても飲まないはうが可いのです。けれども僕は飲のです。それが僕の秘密なんです。如何でしよう、僕と貴様と斯やつて話をするのも何かの運命です、怪い運命ですから、不思議な縁ですから一つ僕の秘密の杯を受けて下さいませんか、え、如何でせう、受けて下さいませんか。』といふ言葉の節々、其聲音、其眼元、其顏色は實に大なる秘密、痛しい秘密を包んで居るやうに思はれた。

『よろしう御座います、それでは一つ戴きましよう。』と自分の答ふるや直ぐ彼は先に立て元の塲處へと引返へすので、自分も其後に從つた。

（三）

『これは上等のブランデーです。自分で上等も無いもんですが、先日上京した時、銀座の龜屋へ行つて最上のを呉れろと內證で三本買て來て此處へ匿して置いたのです、一本は最早たいらげて空罎は滑川に投げ込みました。これが二本目です、未だ一本この砂の中に埋めてあります、無くなれば又た買つて來ます。』

自分は彼の差した杯を受け、少づゝ啜りながら彼の言ふ處を聞て居たが、聞くに連れて自分は彼を怪しむ念の益々高るを禁じ得なかつた。けれども決して彼の秘密に立入うとは思なかつた。

『それで先刻僕が此處へ來て見ると、意外にも貴樣が旣に此塲處を占領して居たのです、驚きましたね、怪しからん人もあるものだ僕の酒庫を犯し、僕の酒宴の莚を奪ひながら平氣で書籍を讀んで居るなんてと、僕はそれで貴樣を見つめながら此處を去らなかつたのです。』と彼は微笑して言つた、其眼元には心の底に潜んで居る彼の優い、正直な人柄の光さへ髣髴いて、自分には更に其が慘しげに見えた、其處で自分も笑を含み[illegible]

『さうでしよう、それでなければあんな眼つきで僕を御覽になる譯は御座い[illegible]。さも恨めしさうでした。』

『イヤ恨めしくは御座いません、情けなかつたのです。オヤ〳〵乃公は隱して置いた酒さへも何時か他人の尻の下に敷れて了うのか、と自分の運命を咀つたのです。咀ふと言へば凄く聞えますが、實は僕にはそんな凄い了見も亦た氣力もありません。運命が僕を咀うて居るのです——貴樣は運命といふこと信じますか？え、運命といふこと。如何です、おも一』と彼は罎を上げたので

『イヤ僕は最早戴ますまい。』と杯を彼に返し『僕は運命論者ではありません。』

彼は手酌で飲み、酒氣を吐いて、

『それては偶然論者ですか。』

『原因結果の理法を信ずるばかりです。』

『けれども其原因は人間の力より發し、そして其結果が人間の頭上に落ち來るばかりでなく、人間の力以上に原因したる結果を人間が受ける場合が澤山ある。その時、貴様は運命といふ人間の力以上の者を感じませんか。』

『感じます、けれども其は自然の力です。そして自然界は原因結果の理法以外には働かないものと僕は信じて居ますから、運命といふ如き神秘らしい名目を其力に加へることは出來ません。』

『さうですか、さうですか、解りました。それては貴様は宇宙に神秘なしと言ふお考なのです、要之、貴様には此宇宙に寄する此人生の意義が、極く平易明亮なので、貴様の頭は二々が四て、一切が間に合うのです。貴様の宇宙は立體てなく平面てす。無

窮無限といふ事實も貴様には何等、感興と畏懼と沈思とを喚び起す當面の大いなる事實ではなく、數の連續を以てインフイニテー（無限）を式で示さうとする數學者の仲間でせう。』と言つて苦しさうな嘆息を洩し、冷かな、嘲るやうな語氣で、

『けれども、實は其方が幸福なのです。僕の言葉で言へば貴様は運命に祝福されて居る方、貴様の言葉で言へば僕は不幸な結果を身に受けて居る男です。』

『それては此て失禮します。』と自分は起上がつた、すると彼は狼狽て自分を引止め、

『まア、ま、貴様怒つたのですか。若し僕の言つた事がお氣に觸つたら御勘辨を願ひます。つい其の自分で勝手に苦んで勝手に色々なことを、馬鹿な譯にも立たん事を考へて居るもんですから、つい見境もなく饒舌のです。否、誰にも斯んなことを言つた事はないのです。けれども何んだか貴様には言つて見たう感じましたから遠慮もなく勝手な熱を吹いたので、貴様には笑はれるかも知れませんが。僕にはやはり怪しの運命が僕と貴様を引着たやうに感ぜられるのです。不幸せな男と思つて、もすこしお話

し下さいませんか、もすこし……』

『けれども別にお話しするやうなことも僕には有りませんが……』

『さう言はないで何卒もすこし此處に居て下さいな！もすこし……。噫！如何して斯う僕は無理ばかり言ふのでしよう！酔たのでせうか。運命です、運命です、可う御座います、貴樣にお話がないなら僕が話します。僕が話すから聞いて下さい、せめて聽て下さい、僕の不幸な運命を！』

此苦痛の叫を聞いて何人か心を動かさざらん。自分は其儘止つて、

『聞きましようとも。僕が聽いてお差支へがなければ何事でも承たまはりませう。』

『聽いて下さいますか。それならお話しませう。けれども僕の運命の怪しき力に惑ふて居る者ですから、其積で聽いて下さい。若し原因結果の理法と貴樣が言ふならそれでも可う御座います。たゞ其原因結果の發展が餘りに人意の外に出て居て、其爲に一人の若い男が無限の苦惱に沈んで居る事實を貴樣が知りましたなら、それを僕が怪し

き運命の力と思ふのも無理の無いことだけは承知下さるだらうと思ひます、で貴樣に聞きますが此處に一人の男があつて、其男が何心なく途を歩いて居ると、何處からとも知れず一の石が飛んで來て其男の頭に命中り、即死する、そのために其男の妻子は餓に沈み、其爲めに母と子は爭ひ、其爲に親子は血を流す程の慘劇を演ずるといふ事實が、此世に有り得ることゝ貴樣は信ずるでせうか。』

『實際有ることか無いことかは知りませんが、有り得ることゝは信じます、それは。』

『さうでせう、それなら貴樣は人の意表に出た原因のために、ふとした原因のために、非常なる悲慘がやゝもすれば、人の頭上に落ちてくるといふ事實を認たむるのです、僕の身の上の如き、全たく其なので、殆んど信ず可からざる怪しい運命が僕を弄そんで居るのです。僕は運命と言ひます。僕にはさう外には信じられんですから。』と言つて彼は吻と嘆息を吐き、

『けれども貴様聴いて呉れますか。』

『聴きますとも！ 何卒かお話なさい。』

『それから先づ手近な酒のことから話しませう。貴様は定めし不思議なことゝ思つて居るでせうが、實は世間に有りふれたことで、苦悩を忘れたさの魔酔剤に用ゐて居るのです。砂の中に隠して置くのは隠くして飲まなければならない宅の事情があるからなので、その上、此場所は如何にも静で且つ快濶で、如何な毒々しい運命の魔も身を隠して人を覗がう暗い蔭のないのが僕の氣に入つたからです。此處へ身を横たへて酒精の力に身を托し高い大空を仰いで居る間は、僕の心が幾何か自由を得る時です。その中には此激烈な酒精が左なきだに弱り果た僕の心臓を次第に破つて、遂には首尾よく僕も自滅するだらうと思つて居ます。』

『そんなら貴様は、自殺を願うて居るのですか。』と自分は驚いて問ふた。

『自殺じやアない、自滅です。運命は僕の自殺すら許さないのです。貴様、運命の鬼

が最も巧に使ふ道具の一は「惑」ですよ。「惑」は悲を苦に變ます。苦悩を更に自乗させます。自殺は決心です。始終惑のために苦んで居る者に、如何して此決心が起りませう。だから「惑」といふ鈍い、重々しい苦悩から脱れるには矢張、自滅といふ遅鈍な方法しか策がないのです。』

と沁々言ふ彼の顔には明に絶望の影が動いて居た。

『如何いふ理由があるのか知りませんが、僕ば他人の自殺を知つて之を傍觀する譯には行きません。自滅といふも自殺に違いないのですから。』と自分が言ふや、

『けれども自殺は人々の自由でしよう。』と彼は笑味を含んで言つた。

『さうかも知れません。然し之を止め得るならば、止めるのが又人々の自由なり義務です。』

『可う御座います。僕も決して自滅したくは有りません若し貴様が僕の物語を悉皆聴いて、其上で僕を救ふの策を立てゝ下さるのなら僕は此上もない幸福です。』

斯う聞いては自分も默つて居られない、

『可しい！何卒か悉皆聽かして貰ひましよう。今度は僕の方からお願します。』

（三）

『僕は高橋信造といふ姓名ですが、高橋の姓は養家のを冒したので、僕の元の性は大塚といふです。

大塚信造と言つた時のことから話しますが、父は大塚剛藏と言つて御存知でも御座いますか、東京控訴院の判事としては一寸世間でも名の知れた男で、剛藏の名の示す如く、剛直一端の人物。隨分僕を教育する上には苦心したやうでした。けれども如何いふものか僕は小兒の時分から學問が嫌ひて、たゞ物陰に一人引込んで、何を考がへるともなく茫然して居ることが何より好でした。十二才の時分と覺えて居ます、頃は春の末といふことは庭の櫻が殆ど散り盡して、色褪せた花瓣の未だ梢に殘つて居たのが、若葉の際からホロ〳〵と一片三片落つる樣を今も判然と想ひだすことが出來るので

知れます。僕は土藏の石段に腰かけて例の如く茫然と庭の面を眺めて居ますと、夕日が斜に庭の木の間に射し込で、さなきだに靜かな庭が、一増肅然して、凝然として、眺めて居ると少年心にも哀いやうな樂いやうな、所謂る春愁でせう、そんな心地になりました。

人の心の不思議を知つて居るものは、童兒の胸にも春の靜な夕を感ずることの、實際有り得ることを否まぬだらうと思ひます。

兎も角も僕はそういふ少年でした。父の剛造はこのことを大變苦にして、僕のことを坊頭臭い子だと數々小言を言ひ、僧侶なら寺へ與て了うなど怒鳴つたこともありました。それに引かへ僕の弟の秀輔は腕白小僧で、僕より二ッ年齡が下でしたが骨格も父に肖て逞ましく、氣象もまるで僕とは變つて居たのです。

父が僕を叱る時、母と弟とは何時も笑つて傍で見て居たものです。母といふはお豊といひ、言葉の少ない、柔和らしく見えて確固した氣象の女でしたが、僕を叱つたこ

ともなく、さりとて甘やかす程に可愛がりもせず、言はゞ寄らず觸らずにして居たやうです。

それで僕の氣象が性來今言つたやうなのであるが、或はさうでなく、僕は小兒の時、早く不自然な境に置れて、我知らずの孤獨な生活を送つた故かも知れないのです。

成程父は僕のことを苦にしました。けれども其心配はたゞ普通の親が其子の上を愛るのとは異つて居たのです、それで父が「折角男に生れたのなら男らしくなれ、女のやうな男は育て甲斐がない」と愚痴めいた小言を言ふ、其言葉の中にも僕の怪しい運命の穂先が見えて居たのですが、少年の僕には未だ氣が着きませんでした。

言ふことを忘れて居ましたが、其頃は父が岡山地方裁判所長の役で、大塚の一家は岡山の市中に住んで居たので、一家が東京に移つたのは未だ餘程後のことです。

或日のことでした、僕が平時のやうに庭へ出て松の根に腰をかけ茫然して居ると、何時の間にか父が傍に來て

『お前は何を考がへて居るのだ。持て生れた氣象なら致方もないが、乃父はお前のやうな氣象は大嫌だ、最少し確固しろ。』と眞面目の顏で言ひますから、僕は顏も上げ得ないで默つて居ました。すると父は僕の傍に腰を下して、

『オイ信造』と言つて急に聲を潜め『お前は誰かに何か聞は爲なかつたか。』

僕には何のことか全然解らないから、驚いて父の顏を仰ぎましたが、不思議にも我知らず涙含みました。それを見て父の顏色は俄に變り、益々聲を潜めて、

『隱すには及ばんぞ、聞たら聞いたと言ふが可え。そんなら乃父には考案があるから。サア隱くさずに言ふが可え。何か聞いたらう？』

此時の父の樣子は餘程狼狽して居るやうでした。それで聲さへ平時と變り、僕は可怕くなりましたから、しく〳〵泣き出すと、父は益々狼狽へ、

『サア言へ！聞いたら聞たと言へ！隱すかお前は』と僕の顏を睨みつけましたから、僕も益々可怕なり

『御免なさい、御免なさい』とたゞ謝罪りました。

『謝罪れと言ふんじやない。若し何かお前が妙なことを聞て、それで茫然考がへて居るじやないかと思ふから、それで訊くのだ。何にも聞かんのなら其で可え。サア正直に言へ！』と今度は眞實に怒つて言ひますから、僕は何のことか解らず、たゞ非常な惡いことでも仕たのかと、おろ〳〵聲で、

『御免なさい、御免なさい。』

『馬鹿！大馬鹿者！誰が謝罪れと言つた。十二にもなつて男の癖に直ぐ泣く。』

怒鳴られたので僕は喫驚して泣きながら父の顔を見て居ると、父も暫くは默つて熟と僕の顔を見て居ましたが、急に涙含んで、

『泣んでも可え、最早乃父も問はんから、サア奥へ歸るが可え。』と優しく言つた其言葉は少ないが、慈愛に滿て居たのです。

其後でした、父が僕のことを餘り言はなくなつたのは。けれども又其後でした僕の

心の底に一片の雲影の沈んだのは。運命の怪しき鬼が其爪を僕の心に打込んだのは實に此時です。

僕は父の言葉が氣になつて堪りませんでした。これも普通の小供なら間もなく忘れて了つたゞらうと思ひますが、僕は忘れる處か、間がな隙がな、何故父は彼のやうな事を問ふたのか、父が斯くまでに狼狽した處を見ると、餘程の大事であらうと、少年心に色々と考へて、そして其大事は僕の身の上に關することだと信ずるやうになりました。

何故でせう。僕は今でも不思議に思つて居るのです。何故父の問ふたことが僕の身の上のことゝ自分で信ずるに至つたでせう。

暗黒に住みなれたものは、能く暗黒に物を見ると同じ事で、不自然なる境に置れたる少年は何時しか其暗き不自然の底に蔭んで居る黒點を認めることが出來たのだらうと思ひます。

けれども僕の其黒點の眞相を捉へ得たのはずつと後のことです。僕は氣にかゝりながらも、これを父に問ひ返すことは出來ず、又母には猶更ら出來ず、小な心を痛めながらも月日を送つて居ました。そして十五の歳に中學校の寄宿舍に入れられましたが、其前に一ッお話して置く事があるのです。

大塚の隣屋敷に廣い桑畑があつて其横に板葺の小な家がある、それに老人夫婦と其ころ十六七になる娘が住て居ました。以前は立派な士族て、桑園は則ち其屋敷跡ださうです。此老人が僕の仲善てしたが、或日僕に圍碁の遊戯を敎へて呉れました。二三日經て夜食の時、このことを父母に話しました處、何時も遊戯のことは餘り氣にしない父が眼に角を立て叱り、母すら驚いた眼を張つて僕の顏を見つめました。そして父母が顏を見合はした時の樣子の尋常でなかつたので、僕は甚だ妙に感じました。

何故僕が圍碁を敵としなければならぬか、それも後に解りましたが、其が解つた時こそ、僕か全く運命の鬼に壓倒せられ、僕が今の苦惱を嘗め盡す初て御座いました。

《四》

僕の十六の時、父は東京に轉任したので大塚一家は父と共に移轉しましたが、僕だけは岡山中學校の寄宿舍に殘されました。

僕は其後三年間の生活を想ふと、僕の此世に於ける眞の生活は唯だ彼の學校時代だけであつたのを知ります。

學生は皆な僕に親切てした。僕は心の自由を恢復し、惡運の手より脱れ、身の上の疑惑を懷くこと次第に薄くなり、沈鬱の氣象までが何時しか雪の融ける如く消えて、快濶な青年の氣を帶びて來ました。

然るに十八の秋、突然東京の父から手紙が來て僕に上京を命じたのです。穩な僕の心は急に擾亂され、僕は殆んど父の眞意を知るに苦しみ、返書を出して責めて今一年、卒業の日まで此儘に仕て置いて貰はうかと思ひましたが、思ひ返して直ぐ上京しました。麴町の宅に着くや、父は一室に僕を喚んで、『早速だがお前と能く相談したいこと

が有るのだ。お前これから法律を學ぶ氣はないかね。』

思ひもかけぬ言葉です。僕は驚いて父の顔を見つめたきり容易に口を開くことが出來ない。

『實は手紙で詳しく言つてやらうかとも思つたが、廻りくどいから喚んだのだ。お前も卒業までと思つたらうし、又大學までとも志して居たらうけれど、人は一日も早く獨立の生活を營む方が可えことはお前も知つて居るだらう。それでお前これから直ぐ私立の法律學校に入るのじや。三年で卒業する。辯護士の試驗を受ける。そした曉は私と懇意な辯護士の事務所に世話してやるから、其處で四五年も實地の勉强をするのじや。其内に獨立して事務所を開けば、それこそ立派なもの、お前も三十にならん内、堂々たる紳士となることが出來る。如何じやな、其方が近道じやぞ。』といふ父の言葉を聽いて居る、僕の心の全く顚動したのも無理はないでせう。

これ實に他人の言葉です。他人の親切です。居候の書生に主人の先生が示す恩愛で

す。

大塚剛藏は何時しか其自然に返つて居たのです。知らず〱其自然を暴露すに至つたのです。僕を外に置くこと三年、其實子なる秀輔のみを傍に愛撫すること三年、人間が其天眞に歸るべき門、墳墓に近くこと三年、此三年の月日は彼をして自然に返らしたのです。けれども彼は未だ其自然を自認することが出來ず、何處までも自分を以前の父の如く、僕を以前の子の如く見やうとして居るのです。

其處で僕は最早進んで僕の希望を述るどころではありません。たゞこれ命これ從ふだけのことを手短かに答へて父の部屋を出てしまひました。

父ばかりでなく母の樣子も一變して居たのです。日の經つに從がうで僕は僕の身の上に一大秘密のあることを益々信ずるやうになり、父母の擧動に氣をつければつける程疑惑の增すばかりなのです。

一度は僕も自分の僻見だらうかと思ひましたが、合憎と想起すは十二の時、庭で父

から問ひつめられた事て、彼を想ひ、これを思へば、最初自分の身の秘密を疑がうてとは出來ないのです。

懊惱の中に神田の法律學校に通つて三月も經ましたらうか。僕は今日こそ父に向ひ、斷然此方から言ひ出して秘密の有無を訊さうと決心し、學校から日の暮方に歸つて夜食を濟ますや、父の居間にゆきました。父はランプの下で手紙を認めて居ましたが、僕を見て、『何ぞ用か』と問ひ、やはり筆を執て居ます。僕は父の脇の火鉢の傍に座つて、暫く默つて居ましたが、此時降りかけて居た空が愈々時雨て來たと見え、廂を打つ霰の音がパラ〱聞えました。父は筆を擱いて徐ら此方に向き、

『何ぞ用でもあるか、』と優しく問ひました。

『少し訊ねたいことが有りますので、』と僅かに口を切るや、父は早くも樣子を見て取つたが

『何じや。』と嚴かに膝を進めました。

『父樣、私は眞實に父樣の兒なのでせうか。』と兼て思ひ定めて置いた通り、單刀直入に問ひました。

『何じやと』と父の一言、其眼光の鋭さ！けれども直ぐ父は顏を柔げて、

『何故お前はそんなことを私に聞くのじや、何か私共がお前に親らしくないことでもして、それでさういふのか。』

『さういふ譯では御座いませんが、私には昔から如何いふ者か此疑があるので、始終胸を痛めて居るので御座ます、知らして益のない秘密だから父上も默つてお居てになるのでせうけれど、私は是非それが知りたいので御座います。』と僕は靜に、決然と言ひ放ちました。

父は暫時く腕組をして考へて居ましたが、徐ろに顏を上げて、

『お前が疑がつて居ることも私は知つて居たのじや。私の方から言ふた方がと思ことも此頃ある。それで最早お前から聞れて見ると猶ほ言ふて了ふが可えから、

とに仕やう。』とそれから父は長々と物語りました。

けれども父の知らして呉れた事實はこれだけなのです。周防山口の地方裁判所が奉職して居た時分、馬場金之助といふ碁客が居て、父と非常に懇親を結び、常に兄弟の如く往來して居たさうです。その馬場といふ人物は一種非凡な處があつて、碁以外に父は其人物を尊敬して居たといふことです。その一子が則ち僕であつたのです。

父は其頃三十八、母は三十四で最早子は出來ないものと諦めて居ると、馬場が病で沒し、其妻も間もなく夫の後を襲て此世を去り、殘つたのは二歲になる男の子、これ幸と父が引取つて自分の兒とし養つたので、父からいふと半分は孤兒を救ふ義俠でしたらう。

僕の生の父母は未だ年が若く、父は三十二、母は二十五であつたさうです。けれども母の籍が未だ馬場の籍に入らん內に僕が生れ、其爲てせう、僕の出產屆が未だ仕てなかつたので、大塚の父は僕を引取るや直に自分の兒として屆けたのださうです。

以上の事を話して大塚の父のいふには、

『其後私は間もなく山口を去つたから、お前の私が實子でないと知るものは多くないのじや。私達夫婦は飽くまで實子の積でこれまで育て〻來たのじや。この先も同じことだから、お前も決して僻見根生を起さず、何處までも私達を父母と思つて老先を見屆けて呉れ。秀輔は實子じやがお前のことは決して知らさんから、お前も眞實の兄となつて生涯彼れの力ともなつて呉れ。』と、老の眼に淚を見るより先に僕は最早泣いて居たのです。

其處で養父と僕とは此等の秘密を飽くまで人に洩さぬ約束をし、又た僕が此先何かの用事で山口にゆくとも、たゞ他所ながら父母の墓に詣て、決して公けにはせぬといふことを僕は養父に約しました。

其後の月日は以前よりも却つて穩かに過たのです。養父も秘密を明けて却つて安心した樣子、僕も養父母の高恩を思ふにつけて、心を傾けて敬愛するやうになり、勉強

をも勵むやうになりました。

そして一日も早く獨立の生活を營み得るやうになり、自分は大塚の家から別れ、義弟の秀輔に家督を讓りたいものと深く心に決する處があつたのです。

三年の月日は忽ち逝き、僕は首尾よく學校を卒業しましたが、猶ほ養父の言葉に從ひ、一年間更に勉强して、さて辯護士の試驗を受けました處、意外の上首尾、養父も大よろこびで早速其友なる井上博士の法律事務所に周旋して呉れました。

兎も角も一人前の辯護士となつて日々京橋區なる事務所に通ふて居ましたが、若し彼のまゝで今日になつたら、養父も其目的通りに僕を始末し、僕も平穩な月日を送つて益々前途の幸福を樂んで居たでせう。

けれども、僕は如何しても惡運の兒であつたのです。殆ど何人も想像することの出來ない陷穽が僕の前に出來て居て、惡運の鬼は慘刻にも僕を突き落しました。

（五）

井上博士は横濱にも一ケ所事務所を持て居ましたが、僕は二十五の春、此事務所に詰めることゝなり、名は井上の部下であつても其實は僕が獨立でやるのと同じことでした。年齡の割合には早い立身と云つても可いだらうと思ひます。

處が横濱に高橋といふ雜貨商があつて、隨分盛大にやつて居ましたが、其主人は女で名は梅、所夫は二三年前に亡なつて一人娘の里子といふを相手に、先づ贅澤な暮を仕て居たのです。

訴訟用から僕は此家に出入することゝなり、僕と里子は戀仲になりました、手短に言ひますが、半年經ぬうちに二人は離れることの出來ないほど、逆せ上げたのです。

そして其結果は井上博士が媒酌となり、遂に僕は大塚の家を隱居し高橋の養子となりました。

僕の口から言ふも變ですが、里子は美人といふほどでなくとも隨分人目を引く程の容色で、丸顏の愛嬌のある女です。そして遠慮なくいひますが全く僕を愛して呉れま

す、けれども此愛は却つて今では僕を苦しめる一大要素になつて居るので、若し里子が斯くまでに僕を愛し、僕が又た斯うまで里子を愛しないならば、僕はこれほどまでに苦しみは仕ないのです。

養母の梅は今五十歳ですが、見た處、四十位にしか見えず、小柄の女で美人の相を供へ、なか〳〵立派な婦人です。そして情の烈しい正直な人柄といへば、智慧の方はやゝ薄いといふことは直ぐ解るでしよう。快活で能く笑ひ能く語りますが、如何かすると恐しい程沈鬱な顔をして、半日何人とも口を交へないことがあります。僕は養子とならぬ以前から此人柄に氣をつけて居ましたが、里子と結婚して高橋の家に寢起することゝなりて間もなく、妙なことを發見したのです。

それは夜の九時頃になると、養母は其居間に籠つて了ひ、不動明王を一心不亂に拜むことて、口に何ごとか念じつゝ床の間にかけた火炎の像の前に禮拜して十時となり十一時となり、時には夜半過に及ぶのです、晝間の中、沈鬱いて居た晩は殊にこれが

激しいやうでした。

僕も初めは默つて居ましたが、餘り妙なので或日このことを里子に訊ねると、里子は手を振つて聲を潛め『默つて居らつしやいよ。あれは二年前から初めたので、あのことを母に話すと母は大變氣嫌を惡くしますから、成るべく知らん顔をして居たほうが可いんですよ。御覽なさい全然狂氣てせう。』と別に氣にもかけぬ樣なので、僕も強ては問ひもしなかつたのです。

けれども其後一月もして或日、僕は事務所から歸り、夜食を終て雜談して居ると、養母は突然、

『怨靈といふものは何年經ても消えないものだらうか。』と問ひました。すると里子は平氣で、

『怨靈なんて有るもんじやアないわ。』と一言で打消さうとすると、母は向になつて、

『生意氣を言ひなさんな。お前見たことはあるまい。だからそんなことを言ふのだ。』

『そんなら母上は見て？』

『見ましたとも。』

『オヤさう、如何な顔をして居て？私も見たいものだ。』と里子は何處までも冷かしてかゝつた。すると母は凄いほど顔色を變へて、

『お前怨靈が見たいの、怨靈が見たいの。眞實に生意氣なことといふよ此人は！。』と言ひ放ち、ツッと起て自分の部屋に引込んで了つた。僕は思はず、

『母上如何か仕て居なさるよ、氣を附けんと……』

里子は不安心な顔をして

『私眞實に氣味が惡いわ。母上は必定何にか妙なことを思つて居るのですよ。』

『ちつと神經を痛めて居なさるやうだね。』と僕も言ひましたが、さて翌日になると別に變つたことはないのです。變つて居るのは唯々何時もの通り夜になると不動樣を拜むことだけで、僕等もこれは最早見慣れて居るから强て氣にもかゝりませんでした、

處が今歲の五月です、僕は何時よりか二時間も早く事務所を退て家へ歸りますと、其日は曇つて居たので家の中は薄暗い中にも母の室は殊に暗いのです。母に少し用事があつたので別に案內もせず襖を開けて中に入ると母は火鉢の傍にぼつねんと座つて居ましたが、僕の顔を見るや、

『ア、ア、アッ、アッ！』と叫んで突起たかと思ふと、又尻餅を舂て熟と僕を見た時の顔色！僕は母が氣絕したのかと喫驚して傍に駈寄りました。

『如何しました、如何しました』と叫けんだ僕の聲を聞て母は僅に座り直し、

『お前だつたか、私は、私は……』と胸を撫すつて居ましたが、其間も不思議さうに僕の顔を見て居たのです。僕は驚ろいて、

『母上如何なさいました。』と聞くと、

『お前が出拔に入つて來たので、私は誰かと思つた。おゝ喫驚した。』と直ぐ床を敷して休んで了ひました。

此事の有つた後は母の神經に益々異常を起し、不動明王を拜むばかりでなく、どは名も知らぬ神符を幾枚となく何處からか貰つて來て、自分の居間の所々に貼つたものです。そして更に妙なのは、これまで自分だけで勝手に信じて居たのが、僕を見て驚ろいた後は、僕に向つても不動を信じろといふので、僕が何故信じなければならぬかと聞くと、
『たゞ默つて信じてお呉れ。それでないと私が心細い。』
『母上の氣が安まるのなら信仰も仕ましようが、それなら私よりもお里の方が可いでしよう。』
『お里では不可せん。彼には關係のないことだから。』
『それでは、私には關係があるのですか。』
『まァそんなことを言はないで信仰してお呉れ、後生だから。』といふ母の言葉を里子も傍で聞て居ましたが、呆れて、

『妙ねえ母上、不動樣が如何して母上と信造さんとには關係があつて私には無いのでしよう。』
『だから私が賴むのじやァありませんか、理由が言はれる位なら賴はしません。』
『だつて無理だわ、信造さんに不動樣を信仰しろなんて、今時の人にそんなことを勸たつて……』
『そんなら賴みません！』と母は怒つて了つたので、僕は言葉を柔げ、
『イヤ私だつて不動樣を信じないとは限りません。だから母上まァ其理由を話て下さいな。如何なことか知りませんが、親子の間だから少も明されないやうなことは無いでしよう。』と求めました。これは母の言ふ處に由て迷信を壓へ神經を靜める方法もあらうかと思つたからです。すると母は暫く考へて居ましたが、吐息をして聲を潜め、
『これ限りの話だよ、誰にも知してはなりませんよ。私が未だ若い時分、お里の父上に緣がない前に或男に言ひ寄られて執着追ひ廻されたのだよ。けれども私は如何して

も其男の心に從はなかつたの。さうすると其男が病氣になつて死ぬ間際に大變私を怨んで色々なことを言つたさうです。それで私も可い心持は仕なかつたが、此處へ緣づいてからは別に氣にもせんで暮して居ました。ところが所夫が死くなつてからといふものは、其男の怨靈が如何かすると現はれて、可怖い顏をして私を睨み、今にも私を取殺さうどするのです。それで私が不動樣を一心に念ずると其怨靈がだん〱消て無なります。それにね、』と、母は一增聲を潛め『この頃は其怨靈が信造に取ついたらしいよ。』

『まア嫌な！』里子は眉を顰めました。

『だつてね、如何かすると信造の顏が私には怨靈そつくりに見えるのよ。』

それで僕に不動樣を信じろと勸めるのです。けれども僕にはそんな眞似は出來ないから、里子と共に色々と怨靈などいふものゝ有るべきでないことを說いたけれど無益でした。母は堅く信じて疑がはないので、僕等も持餘し、此の鎌倉へでも來て居て精神を靜めたらと、無理に勸めて遂に此處の別莊に入たのは今年の五月のことです。』

（六）

高橋信造は此處まで話して來て忽ち頭をあげ、西に傾く日影を愁然と見送つて苦惱に堪えぬ樣であつたが、手早く一杯をあげて一杯飮み干し、

『この先を詳しく話す勇氣は僕にありません。事實を露骨に手短に話しますから、其以上は貴樣の推察を願ふだけです。

高橋梅、則ち僕の養母は僕の眞實の母、生の母であつたのです。妻の里子は父を異した僕の妹であつたのです。如何です、これが奇しい運命でなくて何としませう。斯の如きをも源因結果の理法といへばそれまでゝす。けれども、かゝる理法の下に知らず〱此身を置れた僕から言へば、此天地間にかゝる慘刻なる理法すら行なはるゝを恨みます。

先づ如何して此等の事實が僕に知れたか、其手續を簡單に言へば、母が鎌倉に來て

から一月後、僕は訴訟用で長崎にゆくことゝなり、其途中山口、廣島などへ立寄る心組で居ましたから、見舞かた〳〵鎌倉へ來て母に此事を話しますと、母は眼の色を變て、山口などへ寄るなと言ひます。けれども僕の心には生の父母の墓に參る積がありますから、母には可い加減に言つて置いて、遂に山口に寄つたのです。

兼て大塚の父から聞いて居たから寺は直ぐ分りました。けれども僕は馬場金之助の墓のみ見出して、死だと聞た母の墓を見ないので、不審に思つて老僧に遇ひ、右の事を訊ねました。尤も唯だ所緣のものとのみ、僕の身の上は打明けないのです。

すると老僧は馬場金之助の妻お信の墓のあるべき筈はない。彼の女は金之助の病中に、碁の弟子で、町の豪商某の弟と怪しい仲になり、金之助の病氣は其爲更に重くなつたのを氣の毒とも思ず、遂に飲乳兒を置去りにして駈落して了つたのだと話しました。

老僧は猶も父が病中母を罵しつたこと、死際に大塚剛藏に其一子を托したことまで語りました。

其お信が高橋梅であるといふことは、誰も知らないのです。僕も證據は持て居ません。けれども老僧がお信のことを語る中に早くも僕は今の養母が則ちそれであることを確信したのです。

僕は山口で直ぐ死んで了はうかと思ひました。彼の時、實に彼の時、僕が思ひ切て自殺して了つたら、寧ろ僕は幸であつたのです。

けれども僕は歸つて來ました。一は何とかして確な證據を得たいため、一は里子に引寄せられたのです。里子は兎も角も妹ですから、僕の結婚の不倫であることは言ふまでもないが、僕は妹として里子を考へることは如何しても出來ないのです。

人の心ほど不思議なものはありません。不倫といふ言葉は愛といふ事實には勝てないのです。僕と里子の愛が却つて僕を苦しめると先程言つたのは此事です。

僕は里子を擁して泣きました。幾度も泣きました。僕も亦た母と同じく物狂しくな

りました、憐れなるは里子です。總ての事が里子には怪しき謎で、彼はたゞ惑ひに惑ふばかり、遂には母と同じく怨靈を信ずるやうになり、今も横濱の宅で母と共に不動明王に祈念を凝して居るのです。里子は怨靈の本體を知らず、たゞ母も僕も此怨靈に苦しめられて居るものと信じ、祈念の誠を以て母と所夫を救うとして居るのです。

僕は成るべく母を見ないやうにして居ます。母も僕に遇ふことを好みません。母の眼には成程僕が怨靈の顔と同じく見えるでしようよ。僕は怨靈の兒ですもの！

僕には母を母として愛さなければならん筈です、然し僕は母が僕の父を頻死の際に捨て、僕を頻死の父の病床に捨てゝ、密夫と走つたことを思ふと、言ふべからざる怨恨の情が起るのです。僕の耳には亡父の怒罵の聲が聞こえるのです。僕の眼には疲れ果た身體を起して、何も知らない無心の子を擁き、男泣きに泣き給うた樣が見えるのです。そして此聲を聞き此樣を見る僕には實に怨靈の氣が乘移るのです。

夕暮の空ほの暗い時に、柱に靠れて居た僕が突然、眼を張り呼吸を凝して天の一方

を睨む樣を見た者は母でなくとも逃げ出すでせう。母ならば氣絶するでせう。

けれども僕は里子のことを思ふと、恨も怒も消て、たゞ限りなき悲哀に沈み、この悲哀の底には愛と絶望が戰うて居るのです。

處が此九月でした、僕は餘りの苦惱に平常殆ど酒杯を手にせぬ僕が、里子の止るのも聽ず飲めるだけ飲み、居間の中央に大の字になつて居ると、何と思つたか、母が突然鎌倉から歸つて來て里子だけを其居間に呼びつけました。そして僕は醉つて居ながらも直ぐ其理由の尋常でないことを悟つたのです。

一時間ばかり經つと里子は眼を泣き膨らして僕の居間に歸て來ましたから、

『如何したのだ。』と聞くと里子は僕の傍に突伏して泣きだしました。

『母上が僕を離婚すると云つたのだらう。』と僕は思はず怒鳴りました。すると里子は狼狽て、

『だからね、母が何と言つても所夫決して氣にしないで下さいな。氣狂だと思つて投

擲つて置いて下さいな、ね、後生ですから。』と泣聲を振はして言ひますから、『さういふことなら投擲つて置く譯に行かない。』と僕はいきなり母の居間に突入しました。里子は止める間もなかつたので僕に續いて部室に入つたのです。僕は母の前に座るや、

『貴女は私を離婚すると里子に言つたさうですが、其理由を聞きませう。離婚するなら仕ても私は平氣です。或は寧ろ私の望む處で御座います。けれども理由を被仰い、是非其の理由を聞きませう。』と醉に任せて詰寄りました。すると母は僕の劍幕の餘り鋭いので喫驚して僕の顏を見て居るばかり、一言も發しません。

『サア理由を聞きませう。怨靈が私に乘移つて居るから氣味が惡いといふのでせう。それは氣味が惡いでしようよ。私は怨靈の兒ですもの。』と言ひ放ちました、見る〱母の顏色は變り、物をも言はず部室の外へ駈け出て了ひました。

僕は其まゝ母の居間に寢て了つたのです。眼が覺めるや酒の醉も醒め、頭の上には里子が心配さうに僕の顏を見て坐て居ました。母は直ぐ鎌倉に引返したのでした。

其後僕と母とは會はないのです。僕は母に交つて此方に來て、母は今、横濱の宅に居ますが、里子は兩方を交る〱介抱して、たゞ〱怨靈の業とのみ信じて、二人の胸の中の眞の苦惱を全然知らないのです。

僕は酒を飲むことを里子からも醫師からも禁じられて居ます。けれども如何でせう。此のやうな目に遇つて居る僕がブランディの隱飲みをやるのは、果て無理でせうか。今や僕の力は全く惡運の鬼に挫がれて了ひました。自殺の力もなく、自滅を待つほどの意久地のないものと成り果て居るのです。

如何でせう、以上ザッと話しました僕の今日までの生涯の經過を考がへて見て、僕の心持になつて貰ひたいものです。これが唯だ源因結果の理法に過ないと數學の式に對するやうな冷かな心持で居られるものでせうか。生の母は父の仇です、最愛の妻は兄妹です。これが冷かなる事實です。そして僕の運命です。

若し此運命から僕を救ひ得る人があるなら、僕は謹しんで教を奉じます。其人は僕

の救主です。』

《七》

自分は一言を交へないで以上の物語を聞いた。聞き終つて暫くは一言も發し得なかつた。成程悲慘なる境遇に陷つた人であるとツク／＼氣の毒に思つたのである。けれども止むなくんばと、

『斷然離婚なさつたら如何です。』

『それは新らしき事實を作るばかりです。既に在る事實は其爲めに消えません。』

『けれども其は止を得ないでしよう。』

『だから運命です。離婚した處で生の母が父の仇である事實は消ません。離婚した處て妹を妻として愛する僕の愛は變りません。人の力を以て過去の事實を消すことの出來ない限り、人は到底運命の力より脱ることは出來ないでせう。』

自分は握手して、默禮して、此不幸なる青年紳士と別れた。日は既に落ちて餘光華

かに夕の雲を染め、顧れば我運命論者は淋しき砂山の頂に立つて沖を遙に眺て居た。

其後自分は此男に遇ないのである。

巡査

この頃ふとした事から自分は一人の巡査、山田銑太郎といふのに懇意になつた。年齡は三十四五でもあらうか、骨格の逞しい、背の高い堂々たる偉丈夫である。

自分は人相のことはよく知らぬが、圓い顏の、口髭頰髯ともに眞黑で、鼻も眼も大きな、見た處は柔和の相貌とは言へないがさて實際はなか〳〵好人物なのが世間には隨分ある、この巡査も其種類に屬するらしい。

若し其人が沈默であつたなら斯うゐふのは餘り受の可い人相ではない。處が能く語り能く笑ふ、笑ふ時は其眼元に一種の愛嬌がこぼれる、語る時は相手の迷惑もなにも無頓着で、のべつに行る。そして思ひもつかぬ比喩など用ゐて、それを得意で二度も三度も繰返す、如何だらう、斯うゐふ人物は他の憎惡を受けるだらうか。

或日、明日は非番で宅に居ますから是非入來しやいと頻りに促がされたから、午後

一時ごろ自分は山田巡査を訪ねて見た。

『ね、是非入來しやい、何にもないが寒いから……これをやつて饒舌りましよう。』とグイ飲の手眞似をして見せた。

指物屋の二階の一室が先生の住居である。仕事場の横から急な狹い梯子段を上ると、直ぐ當面に炭俵が置いてある、靴が蟇のやうに一隅に眠つて居る、太い棒が其傍に突立つて番をして居る、多分ステツキといふのだらう。別の一室には書生でも居るか、微吟の聲が洩れて居たが其前の薄暗い板間を通ると突當の部屋が山田巡査の宅。

『やツ、よく入來しやいました。サア此方へ、サア！』と言ひながら急に起つて押入から座蒲團を一枚、長火鉢の向へ投出した。

先生一杯やりはじめて、やゝ醉の廻つて居る時分であつた。

『獨身者の生活は斯んなものでしてナ。御覽の通りで狹いも狹いし、世帶道具一切がこの一室にあるのだから、まア何のことはない豚小屋ですな、豚小屋で……』と其

處らをきよろきよろ、何か探して居るやうであつたが、急に前の杯をグイと呑干して

『まア一ッ！御飯が濟んだのなら酒だけ一ッ、この酒は決して頭へ來るやうな酒じやア御座いませんから。』

自分は受けてちやぶ臺に置いた。成程狹いが、狹いなりに一室がきちんと整理いて居る。作出しの押入が一間、室内にはみ出して其唐紙は補修だらけ、壁はきたなく落書がしてある、疊は黑い、障子は煤けて居る、成程むさくるしい部屋であるが、これ又何處となく掃事が屆いてサッパリして居る。どうして、豚小屋どころか！

窓の下に机、机の右に書籍箱、横に長火鉢、火鉢に並んでちやぶ臺、右手の壁に沿ふて簞笥鼠入らず、其上に違棚、總てが古いが、總てが清潔である、煙草箱、菓子器茶入、蓋物、帙入の書籍、總てが其處を得て、行儀よく並んで居る書籍箱の上には盆栽の小鉢が三ッ四ッ置いてある。

自分は杯を返しながら

『流石警官だけに貴樣は大變清潔ずきですね。』

『ハヽヽヽ、イヤ清潔すぎていふ程のこともないが、これが私の性分でしてナ、どうも惡い性分でしてナ、他人のすることは氣に入らんていふんだから困つて了います、殊に食器ですナア、茶椀でもなんでも他人に爲て貰うと如何も心持が惡い、それで悉皆自分でやりますがね……。』

『ぢやアいよ〳〵獨身者誂向といふ性分ですね、ハヽヽヽ』

『全くさうです、だから國に女房もありますが決して呼びません、一人で不自由を感じないんですから。』

『夫人がお有りンなるんですか、さうですか、それじやア何にも獨身者の詫住居を好んでするにやア當らないでしよう、そしてお兒さんは？』

『小兒もあります、五才になる男の兒が一人あります、がです、矢張一人のはうが氣

樂ですナア』と手酌で飲みながら『尤も私の妻を呼ばないのは他にも理由がありますがね。』

『どんな理由がありますか知りませんが、兎も角妻子があれば一家團欒の樂を享けないのは嘘でしよう？、貴様さびしく思ひませんか。』

『イヤ全く孤獨く感じないこともないですがナ、ナニ私も時々歸るし妻もちよい〳〵やつて來ますよ、汽車で日往復か出來ますからナニ便利な世の中ですよ、御心配には及びません夜具も二人前備へてあります、ハツハツヽヽヽ』

『ハヽヽ先づさう諦めて居れば仔細はありませんナ』

『サア何か食つて下さい、ろくなものは御座いませんがね、どうです豆は、密柑でも。』

ちやぶ臺には煮豆、數子、密柑、酢魚章といふ風なものが雜然と並べてある。柱にかけた花挿には印ばかりの松ケ枝、冬の日脚は傾いて西の窓をまともに射し、主人の顔は赤く眼はとろりとして矢張正月は正月らしい。

主人は專賣特許の厨爐にかけた鐵瓶から徳利を出しながら

『全く一人のはうが氣樂ですよ。サア熱いところを一ツ、それに私は敢えて好んで妻を持つたわけじやアないんですからナ。ふとした處から養子に貰はれたので、若しそれで無かつたら今でも獨身でサア、第一巡査をして妻子を養つて樂をしようなんテ、ちつと出來にくい藝ですナ、蛇の綱渡よりか困難いことです、エ、貴様は蛇の綱渡を見たことありますか、私は一ツ見ました。姓名は言はれませんが、私どもの仲間に妻と小供の三人と母親とを養つて、それで小ザツパリと暮して居るものがある、感心なものでしよう、尤も酒は呑ません、煙草もやりません。こんな男は例外です。私どもには到底出來ない藝です。』

『然し田舎に細君を置いて處で費ものは費るから同じ事でしよう、文句を言はないで一所におなんなさい、細君が可愛さうだ。』

『ハヽヽヽツ貴様は大に細君孝行だ、イヤ私だつてね、まんざら女房を可愛がらな

いわけはないんだが、田舎には多少の資産があるんです、それに未だ父母も居ますから却て妻は先方に居たはうが相方の便利なんです、まア私なんざア全く道樂で斯んな職をやつて居るんでサア、イヤになれば直ぐ止めて田舎へ引込んだつて食うに困るやうなことはないんですからナア。』

『氣樂ですねエ。』

『全く氣樂です！だから酒は石崎から斯うやつて樽で取つてグイ〳〵飮むのですが、澤之鶴も可いが私どもにやア少し甘味が勝つて居るやうで却てキ印の方が口に合ひます、どうも料理屋の混成酒だけは閉口しますナア。』

と先生頻りに酒の品評をはじめ、混成酒の攻撃をやつて居たが醉は益々發して來たらしい

『どうです、一ッ隱藝をお出しなさい、エ、僕ですか、僕は全く無藝、たゞ飮めば則ち眠る、直ぐ寢て了います！』

成程さも眠むさうな、とろんこな眼をして居る、

『僕でも貴様方のやうにナア、文章が書けるなら隨分書いて見たい事があるんだが、だめだ！』

と暫く眼を閉ぢて默つて居たが、急ににつこり笑つて、

『ウンさうだ！、一ッ見て貰うものがある。』

と机の抽出から草稿らしい者を五六枚出して、其一枚を自分の前へ突出した。見ると漢文で

『題警察法』といふ一編である。

『夫れ警察の法たる事無きを以て至れりと爲す』

と一種の口調で體軀をゆりながら漢文を朗讀しだした。

『事を治むる之に次ぐ、エ、どうです。』

『贊成々々。』

『功無きを以て盡すと爲す、功を立つる之に次ぐ、故に、どうです、故に日夜奔走して而して事を治め、千辛萬苦して而して功を立つる者は上の上なる者に非ざる也。』

『だから臥て居るてンですか。』

『ハヽヽヽッまア先を聞いて下さい。最上の法は事を治むるに非ず、功を立つるに非ず、常に無形に見、無形に聽き、以て其機先を制す、故に事有るなくして而して自ら治り、功爲す無くして而して自ら成る、是れ所謂る爲し易きに爲し而して治め易きに治むる者也、どうです名論でしよう！是の故に善く警察の道を盡す者は功名無く、治跡無く、神機妙道只だ其人に存す焉、愚者解す可からざる也、夫子曰く人飲食せざる莫き也、能く味を知る鮮き也！文章は拙いが主意はどうです。』

『文章も面白ろい、主意は大賛成です！』

『神機妙道只だ其人に存す、愚者解すべからざるなりか、ハヽヽヽヽッ』と頗る得意である。

『先づ酒でも飲んで十分精神を養つて其機先を制すと行くのです、エ、どうです熱い處を。』

『もう僕は澤山！何か外に面白いものはありませんか、詩のやうな者は。』

『詩ですか、あります、有りますもすさまじいが幼學便覽出來といふのが、二三ダースあります。』

と罫紙に淸書したのを四五枚出して見せたが、

『イヤ讀まれちやア困ります、一ッ二ッ僕が吟じます、さてと、どれもまずいなア、春夜偶成かナ、朦朧烟月の下、一醉花に對して眠る、風冷やかに夢驚き覺れば、飛紅枕邊を埋むはどうです、エ、これは下田歌子さんの歌に何とかいふのが有りましたねエ、そら何と言ひましたなア、今ちよつと忘れましたが、それを飜譯したのですがまるて比較になりませんなア、あの婆さん、と言つちやア失禮だが全く歌はうまいもんですなア』と左右に身軀を搖動ながら今一度春夜偶成を操返した『それから此處に一

ッちよつと異なのが有ります、權門所見と題して、權門昏夜哀を乞ふ頻りなり、朝に見る揚々として意氣新なるを、妻妾は知らず人の罵倒するを、醜郎滿面髯塵を帶ぶはどうです、エ。』

『痛快ですなア。』

『これは或大臣の警衛をして居た時の作です、醜郎の滿面、髯塵を帶ぶ——かね。』

『も一ッ。』

『さうですなア』と草稿を操返して居たが、突如として『故山の好景久しく相違う、斗米官逝未だ非を悟らず、杜宇呼び醒す名利の夢、聲々、復た不如歸を喚ぶ——。ハツハツ、、、、到々本音を吐いちやッた！』

『ハツハツ、、、、到々本音が出ましたね。』

『ハツ、、、、』と笑つたが山田巡査は眼を閉じたまゝ何を考へるともなくうつらうつらとして居る樣子であつた、半分居眠つて居るのである。突然、

『イヤ矢張この方が氣樂だ！』と叫けんで、眼を見開き自分を見て莞爾笑つたが、直ぐ又居眠を始めた。

自分は暫時く凝然として居たが起すのも氣の毒とそつと起つて室を出た。

指物屋の店から四五十間下ると四辻がある、自分は此處に來た時、後を振り向くと指屋物の二階の窓から山田巡査の髭髯だらけの顏が出て居た。頻りと默頭をして居た。

自分は全然この巡査が氣に入つて了つた。

酒中日記

五月三日（明治三十〇年）

『あの男は如何なつたか知ら』との噂、よく有ることとて、四五人集つて以前の話が出ると、消えて去くなつた者の身の上に、ツイ話が移るものである。

この大河今蔵、恐らく今時分やはり同じやうに噂せられて居るかも知れない。『時に大河は如何したらう。』升屋の老人口をきる。

『最早死んだかも知れない。』と誰かゞ氣の無い返事を爲る。『全くあの男ほど氣の毒な人はないよ。』と老人は例の哀れつぽい聲。

氣の毒がつて下さる段は難有い。然し幸か不幸か、大河といふ男今以て生て居る、而も頗る達者、此外何十年此世に呼吸の音を續けますことやら。憚りながら未だ三十二で御座る。

まさか此小ぽけな島、馬島といふ島、人口百二十三の一人となつて、二十人あるなしの小供を對手に、やはり例の敎員、然し今度は私塾なり、アイウエオを敎へて居るといふ事は御存知あるまい。無いのが當然で、斯く申す自分すら、自分の身が流れ流れて思ひもかけぬ此島で斯んな暮を爲るとは夢にも思はなかつたこと。

噂をすれば影とやらで、ひよつくり自分が現はれたなら、升屋の老人喫驚りして開いた口がふさがらぬかも知れない。『いつたい君は如何したといふんだ』と漸とのことで聲を出す。それから話して一時間も經つと又喫驚、今度は腹の中で。『いつたい此男は如何したのだらう、五年見ない間に全然氣象まで變つて了つた。』

驚き給ふな源因がある。第一、日記といふ者書いたことのない自分が斯うやつて、こまめに筆を走らして、如何でもよい自分のやうな男の身の上に有つたことや、有ることを、今日からポツ〳〵書いて見やうといふ氣になつたのからして、自分は五年前の大河では御座らぬ。

あゝ今は氣樂である。此島や島人はすつかり自分の氣に入つて了つた。瀬戸内にこんな島があつて、自分のやうな男を、兎も角も呑氣に過さして呉れるかと思ふと、正にこれ夢物語の一章一節、と言ひたくなる。

酒を呑んで書くと、少々手がふるへて困る、然し酒を呑まないで書くと心がふるへるかも知れない。『あゝ氣の弱い男！』何處に自分が變つて居る、やはりこれが自分の本音だらう。

可愛い可愛いお露が遊びに來たから、今日はこれで筆を投げる。

○○○

五月四日

自分が升屋の老人から百圓受取つて机の抽斗に納つたのは忘れもせぬ十月二十五日事の初が此の日で、其後自分は此日に逢ふごとに頸を縮めて眼をつぶる。なるべく此日の事を思ひ出さないやうにして居たが、今では平氣なもの。一件がありありと眼の先に浮んで來る。

あの頃の自分は眞面目なもので、酒は飲めても飲まぬやうに、謹嚴正直、いやはや四角張た男であつた。

老人連、全然惚れ込んでしまつた。一にも大河、二にも大河。公立八雲小學校の事は大河でなければ竹箒一本買ふことも決定るわけにゆかぬ次第。校長になつてから二年目に升屋の老人、遂に女房の世話まで燒いて、お政を自分の妻にした。子が出來た。お政も子供も病身、健康なは自分ばかり。それでも一家無事に平和に、これぞといふ面白いこともない代り、又これぞといふ心配もなく日を送つて居た。

處が日清戰爭、連戰連勝、軍人でなければ夜も日も明けぬお目出度いことゝなつて、そして自分の母と妹とが墮落した。

母と妹とは自分逹夫婦と同棲するのが窮屈で、赤坂區新町に下宿屋を開業。それも表向ではなく、例の素人下宿。いやに氣位を高くして、家が廣いから、それにどうせ遊んで居る身體、若いものを世話してやるだけのこと、もつとも性の知れぬお方は御

免被るとの觸込み。

自體拙者は氣に入らないので、頻りと止めて見たが、もと〳〵強情我慢な母親、妹は我儘者、母に甘やかされて育てられ、三絃まで仕込まれて自墮落者に首尾よく成りおほせた女。お前たちの厄介にさへならなければ可からうとの挨拶で、頭から自分の注意は取あげない。

これぞといふ間違もなく半年經ち、日清戰爭となつて、兵隊が下宿する。初は一人の下士。これが導火線、類を以て集り、終には酒、歌、軍歌、日本帝國萬々歲！そして母と妹との墮落。

『國家の干城たる軍人』が惡いのか、母と妹とが惡いのか、今更いふべき問題でもないが、たゞ一の動かすべからざる事實あり曰く、娘を持ちし親々は、それが華族でも、富豪でも、官吏でも、商人でも、皆な悉く軍人を婿に持ちたいといふ熱望を以て居たのである。

娘は娘で軍人を情夫に持つことは、寧ろ誇るべきことである、とまで思つて居たらしい。

軍人は軍人で、殊に下士以下は人の娘は勿論、後家は勿論、或は人の妻をすら翫弄して、それが當然の權利であり、國民の義務であるとまで濟まして居たらしい。

三圓借せ、五圓借せ、母はそろ〳〵自分を攻め初めた。自分は出來るだけ其の望に應じて、苦しい中を何とか工夫して出してやつた。

月給十五圓。それで親子三人が食つてゆくのである。なんて餘裕があらう。小學校の教員はすべからく燒鹽か何にかて三度のめしを食ひ、以て教場に於ては國家の干城たる軍人を崇拜すべく七歲より十三四歲までの兒童に教訓せよと時代は命令して居るのである。

唯々として自分は此命令を奉じて居た。

然し母と妹との節操を軍人閣下に獻上し、更らに又、此十五圓の中から五圓三圓と

割いて、母と妹とが淫酒の料に捧げなければならぬかを思ひ、流石お人好の自分も頗る當惑したのである。

酒が醒めかけて來た！今日はこゝて止める。

〇〇〇
五月六日

昨日は若い者が三四人押かけて來て、夜の十二時過ぎまで飲み、だみ聲を張上げて歌つたので疲れて了い、何時寢たのか知らぬ間に夜が明けて今日。それで昨日の日記がお休み。

さても氣樂な敎員。酒を飲うが歌はうが、お露を可愛がつて抱いて寢やうが、それて先生の資格なしとやかましく言ふ者は此島に一人もない。

特別に自分を尊敬も爲ない代りに、魚あれば魚、野菜あれば野菜、誰が持て來たとも知れず臺所に投りこんてある。一升德利をぶらさげて先生、僴りながら地酒ては御座らぬ、お露の酌て飮んて見さつせと椽先へ置いて去く老人もある。

あゝ氣樂だ、自由だ。母もいらぬ、妹もいらぬ、妻子もいらぬ。慾もなければ得もない。それて居てお露が無暗に可愛のは不思議じやないか。

何が不意議。可愛いから可愛いのて、お露とならば何時ても死ぬる。

十日前のこと、自分は椽先に出て月を眺め、朧ろに霞んて湖水のやうな海を見おろしながら、お露の酌て飮んて居ると、ふと死んだ妻子のこと、東京の母や妹のことを思ひだし、又此身の流轉を思うて、我知らず涙を落すと、お露は見て居たが、其鈴のやうな眼に涙を一ぱい含くませた。その以前自分はお露に涙を見せたことなく、お露も亦た自分に涙を見せたことはないのてある。さても可愛い此娘、此大河なる團栗眼の猿のやうな顏をして居る男にも何處か異な處が有るかして、朝夕慕ひ寄り、乙女心の限りを盡して親切にして吳れる不便さ。

自然生の三吉が文句じやないが、今となりては、外に望は何にもない、光榮ある歷史もなければ國家の干城たる軍人も居ない此島。此島に生れて此島に死し、死しては

彼の、そら今風が鳴つて居る山陰の靜かな墓場に眠る人々の仲間入りして、此島の土となりたいばかり。

お露を妻に持つて島の者にならつせ、お前さん一人、遊んで居ても島の者が一生養なつて上げまさ、と六兵衛が言つて呉れた時、嬉しいやら情けないやらで泣きたかつた。

そして見ると、自分の周圍には何處かに悲慘の影が取卷て居て、人の憐愍を自然に惹くのかも知れない。自分の性質には何處かに人なつこいところがあつて、自と人の親愛を受けるのかも知れない。

何れにせよ、自分の性質には思ひ切つて人に逆らうことの出來る、ピンとした處はないので、心では思つても行に出すことの出來ない場合が幾多もある。

あゝ哀れ氣の毒千萬なる男よ！母の爲め妹の爲めに可くないと思つた下宿の件も遂には止め終せなかつたも當然。母と妹の淺ましい墮落を知りつゝも思ひ切つて言ひだし得ず、言ひだしても爭さうことの出來なかつたも當然。苦るしい中を算段して、いやいやながらも母と妹とに婬酒の料をさゝげたもこれ又當然。

二十四日の晩であつた、母から手紙が來て、明二十五日の午後まかり出るから金五圓至急に調達せよと申込んで來た時、自分は思はず吐息をついて長火鉢の前に坐つたまゝ拱手をして首を垂れた。

『如何なさいました？』と病身な妻は驚いて問うた。

『これを御覽』と自分は手紙を妻に渡した。妻は見て居たが、これも默つて吐息したまゝ手紙を下に置く。

『何故こんな無理ばかり言つて來るだらう。』

『さうですね……』

『最早一文なしだらう？』

『一圓ばかし有ります。』

『有つたつて其を渡したら宅で困つて了う。可いよ、明日母上が來たら私がきつぱりお謝絶するから。さう〳〵は私達だつて困らアね。それも今日母上や妹の露命をつなぐ爲めとか何とか別に立派な費ひ途でも有るのなら、借金してだつて、衣類を質草に爲たつて五圓や三圓位なら私の力にても出來して上げるけれど、兵隊に貢ぐのやら譯もわからない金だもの。可いよ、明日こそ私しが思ひきり言ふから、それで聽かないなら如何にでも勝手になさいと言つてやるから。』

『言ふのはお止しなさいよ。』

『何故や、言ふよ、明日こそ言ふよ。』

『だつてね母上のことだから又大きな聲をして必定お怒鳴になるから、近處へ聞えても外聞が惡いし、それにね、貴所が思ひ切たことを被仰ると直ぐ私が恨まれますから。それでなくても私が氣に喰はんから一所に居たくても爲方なしに別居して嫌な下宿屋までして居るんだつて言ひふらしてお居でになるんですから。』とお政は最早泣き聲になつて居る。

『然し實際明日母上が見えたつて渡す金が無いじやアないか。』

『私が明日のお晝までに如何にか致します。』

『如何にかつて、お前に出來る位なら私にだつて何とか爲りさうなものだが、實際始末にいけないのじやないか。』

『今度だけ私にまかして下さい、何とか致しますから。』と言はれて自分は强て爭はず、めいり込んだ氣を引きたてゝ改築事務を少しばかり執て床に就いて。

〇〇〇〇

五月七日

一寢入したかと思ふと、フト眼が覺めた、眼が覺めたのではなく可怕い力が闇の底から手を伸して搖り起したのである。

其頃學校改築のことで自分は其委員長。自分の外に六名の委員が居ても多くは有名無實で、本氣で世話を燒くものは自分の外に升屋の老人ばかり。豫算から寄附金のこ

とまで自分が先に立つて苦勞する、敷地の買上、其代價の交渉、受負師との掛引、割當てた寄附金の取立、現金の始末まで自分に爲せられるので、自然と算盤が机の上に置れ通し。持前の性分、間に合はして置くことが出來ず、朝から寢るまで心配の絶えない處へ、母と妹とが墮落の件。殊に又ぞろ母からの無理な申込で頭を痛めた故か、其夜は寢ぐるしく、怪しい夢ばかり見て我ながら眠つて居るのか、覺めて居るのか判然ぬ位であつた。

何か物音が爲たと思ふと眼が覺めた。さては盜賊と半ば身體を起してきよろ〳〵と四邊を見廻したが、森として其樣子もない。夢であつたか現であつたか、頭が錯亂して居るので判然しない。

言ふに言はれぬ恐怖さが身內に漲ぎつて如何しても其儘眠ることが出來ないので、思ひ切つて起上がつた。

次の八疊の間の間の襖は故意と一枚開けてあるが、豆洋燈の火は其入口までも達か

ず、中は眞闇。自分の寢て居る六疊の間すら煤けた天井の影暗く被ひ、黴霧でもかゝつたやうに思はれた。

妻のお政はすや〳〵と寢入り、其傍に二歲になる助が其顏を小枕に押着けて愛らしい手を母の腮の下に遠慮なく突込んで居る。お政の顏色の惡さ。さなきだに蒼ざめて血色惡しき顏に夜目には死人かと怪しまれるばかり。剩へ髮は亂れて頰にかゝり、頰の肉やゝ落ちて、身體の健かならぬと心に苦勞多きとを示して居る。自分は音を立てぬやうに其枕元を步いて、長火鉢の上なる豆洋燈を取上げた。

暫時聽耳を聳て何を聞くともなく突立つて居たのは、猶ほ八疊の間を見分する必要が有るかと疑がつて居るので。しかし確に簞笥を開ける音がした、障子をする〳〵と開ける音を聞いて、夢か現か兎も角と八疊の間に忍足で入つて見たが、別に異變はない。椽端から、臺所に出て眞闇の中をそつと覗くと、臭氣のある冷たい空氣が氣味惡く顏を掠めた。敷居に立つて豆洋燈を高くかゝげて眞暗の隅々を熟と見て居たが、竈の横

にかくれて黒い風呂敷包が半分出て居るのに目が着いた。不審に思ひ、中を開けて見ると現はれたのが一筋の女帶。

驚くまいことか、これお政が外出の唯た一本の帶、升屋の老人が特に祝はつて呉れた品である。何故これが此所に隱してあるのだらう。

自分の寢靜まるのを待つて、お政はひそかに簞笥から此帶を引出し、明朝早くこれを質屋に持込んで母への金を作る積と思ひ當つた時、自分は我知らず涙が頬を流れるのを拭き得なかつた。

自分は其まゝ帶を風呂敷に包んで元の所に置き、寢間に還つて長火鉢の前に坐わり烟草を吹かしながら物思に沈んだ。自分は果して彼の母の實子だらうかといふやうな怪しい慘ましい考が起つて來る。現に自分の氣性と母及び妹の氣象とは全然異つて居る。然し父には十の年に別れたのであるから、父の氣象に自分が似て生れたといふことも自分には解らない。かすかに覺えて居る所では父は柔和い方で、荒々しく母や

自分などを叱つたことはなかつた。母に叱られて柱に縛りつけられたのを父が解て呉れたことを覺えて居る。其時母が父にも怒を移して慳貪に口をきいたことをも思ひ出し、父のこと母のこと、それから其へと思を聯ね、果は親子の愛、兄弟の愛、夫婦の愛などいふことにまで考へ込んで、まれまでに知らない深い人情の秘密に觸れたやうな氣にもなつた。

お政は痛ましく助は可愛く、父上は戀しく、懷かしく、母と妹は惡くもあり、痛ましくもあり。子供の時など思ひ起しては戀しくもあり、突然寄附金の事を思ひだしては心配で堪らず、運動場に敷く小利砂のことまで考へだし、頭はぐら〳〵して氣は遠くなり、それて居て神經は何處に焦々した氣味がある……

嗚呼！何故彼の時自分は酒を呑なかつたらう。今は舌打して飲む酒、呑ば酔ひ、酔へば樂しい此酒を何故飲なかつたらう。

○○○

五月八日

明くれば十月二十五日自分に取つて大厄日。

自分は朝起きて、日曜日のことゆゑ朝食も急がず、小兒を抱て庭に出で、其處らをぶらぶら散歩しながら考へた、帶の事を自分から言ひ出して止めやうかと。

然し止めて見た處で別に金の工面の出來るでもなし、さりとて斷然母に謝絶することは妻の斷て止める處でもあるし。つまり自分は知らぬ顔をして居て妻の爲すがまゝに任かすことに思ひ定めた。

朝食を終るや直ぐ机に向つて改築事務を執つて居ると、升屋の老人、生垣の外から聲をかけた。

『お早う御座い、』と言ひつゝ椽先に廻つて『朝ぱらから御勉強だね。』

『折角の日曜も此頃はつぶれて御座います。』

『ハヽヽヽハツ何に今に遊ばれるよ、學校でも立派に出來あがつた處で、しんみりと戰ひたいものだ、私は今からそれを樂みに爲て居る。』

座に着いて老人は烟管を取出した。此老人と自分、外に村の者、町の者、出張所の代診、派出所の巡査など五六名の者は笊碁の仲間で、殊に自分と升屋とは暇さへあれば氣永な勝負を爭つて樂んで居たのが、改築の騷から此方、外の者は兎も角、自分は殆ど何より嗜好、唯一の道樂である碁すら打ち得なかつたのである。

『來月一ぱいは打てさうもありません。』

『その代り冬休といふ奴が直ぐ前に控へて居ますからな。左右に火鉢、甘い茶を飲みながら打つ樂は又別だ。』といひつゝ老人は懷中から新聞を一枚出して、急に眞顔になり

『ちよつと是を御覽。』

披げて二面の電報欄を指した。見ると或地方で小學校新築落成式を擧げし當日、廊の欄が倒れて四五十人の兒童庭に顚落し重傷者二名、輕傷者三十名との珍事の報道である

『大變ですね。どうしたと言ふんでしよう？』

『だから私が言はんことじやあない。其通りだ、安普請をすると其通りだ。原などは餘り經費がかゝり過ぎるなんて理屈を並べたが、斯いふ實例が上つて見ると文句はあるまい。全體大切な兒童を幾百人と集るのだもの、丈夫な上にも丈夫に建るのが當然だ。今日一つ原に會つて此新聞を見せてやらなければならん。』

『無闇な事も出來ますまいが、今度の設計なら決して高い豫算じや御座いませんよ、何にしろあの建坪ですもの、八千圓なら安い位なものです。』

『いや其安價のが私や氣に喰はんのだが、先づ御互の議論が通つて彼の豫算で行くのだから、さう安ぽい直ぐ欄の倒れるやうな險呑なものは出來上らんと思ふがね、』と言つて氣を更へ、『其處で寄附金じやが未だ大な口が二三殘つては居ないかね？』

『未だ三口ほど殘つて居ます。』

『それぢやァ私がこれから廻つて見やう。』

『さうですか、それでは大井樣を願ひます。今日渡すから人をよこして呉ろと云つて來ましたから。』

『百圓だつたね？』と老人は念を推した。

『さうです。』

其處が老人は程遠からぬ華族大井家の方へ廻るとて出行きたるに引きちがへてお政は外から歸つて來た。老人と自分が話して居る間に質屋に行つて來たのである。

『金は出來たらうか。』と自分は何處までも知らぬ顏で聞いた。妻は、

『出來ました。』と言ひつゝ小兒を脊から下して膝に乘せた。

『如何して出來たのだ。』と自分は問はざるを得なくなつた。

『如何してても可いぢやァありませんか、私が……』と言ひかけて淋しげな笑を洩した。

『さうさ、お前に任したのだから……處で母上さんが見えたら最早下宿屋は止して

一所になつて下さいと言つて見やうじやないか。』

『言つた處で無益で御座いますよ。』

『無益といふこともあるまい。熱心に說けば……』

『無益ですよ、却つて氣を惡くなさるばかりですよ。』

『それは多少か氣を惡くなさるだらうけれど、言はないで置けばこの後どんなことに成りゆくかも知れないよ。』

『さうですねえ……然し兵隊さんと如何とかいふやうなことは被仰んはうが可う御座いますよ。』

『まさか其んなことまでも言はれも爲まいけれど。』

一時間立たぬうちに升屋の老人は歸つて來て、

『甘く行つたよ。』と座に着いた。

『どうも御苦勞樣でした。』

『ハイ確かに百圓。渡しましたよ。驗ためて下さい。』と紙包を自分の前に。

『今日は日曜で銀行がだめですから貴所の宅に預かつて下さいませんか。私の家は用心が惡う御座いますから。』と自分が言ふを老人は笑つて打消し、

『大丈夫だよ、今夜だけだもの、私宅だつて金庫を備へつけて置くほどの酒屋じやアなし、ハツハツヽヽヽ。取られる時になりや私の處だつて同じだ。大井樣は濟んだとして、後の二軒は誰が行く筈になつて居ます。』

『午後私が廻る積りです。』

升屋の老人は去り、自分は百圓の紙包を机の抽斗に入れた。

○○○

五月九日

自分は五年前の事を書いて居るのである。十月二十五日の事を書いて居るのである。厭になつて了つた。書きたくない。

けれども書く、酒を飲みながら書く。此頃島の若いものと一しよに稽古をして居る

義太夫。さうだ『玉三』でも唸りながら書かう。面白い！

——晝飯を濟まして、自分は外出けやうとする處へ母が來て。母が來たら自分の歸るまで待つて貰う筈にして置いた處へ。

色の淺黑い、眼に劍のある、一見して一癖あるべき面魂といふのが母の人相。背は自分と異つてすらりと高い方。言葉に力がある。

此母の前へ出ると自分の妻などはみじめな者。妻の一言いふ中に母は三言五言いふ。妻はもぢ〳〵しながらいふ。母は號令でもするやうに言ふ。母は三言目には喧嘩腰、妻は罵倒されて蒼くなつて小さくなる。女でもこれほど異うものかも怪しまれる位。

母者ひとの御入來。

其處は端近先づ〳〵これへとも何とも言はぬ中に母はつか〳〵と上つて長火鉢の向へむづとばかり、

『手紙は屆いたかね。』とは一言て先づ我々の荒膽をひしがれた。

『屆きました』と自分は答へた。

『言つて來たことは都合がつくかね？』

『用意して置きました。』とお政は小さい聲、母はそろ〳〵氣嫌を改めて、

『あゝ其は難有う。毎度お氣の毒だと思ふんだけれど、ツイね私の方も請取る金が都合よく請取れなかつたりするものだから、此方も困るだらうとは知りつゝ、何處へも言つて行く處がないし、ツイね。』と言つて莞爾。

能く見ると母の顏は決して下品な出來ではない。柔和に構へて、チンとすまして居られると、其劍のある眼つきが却つて威を示し、何處の高貴のお部屋樣かと受取られるところもある。

『イヽえ如何致しまして。』とお政は言つたぎり、伏目になつて助の頭を撫でゝ居る。母はちよつと助を見たが、お世辭にも孫の氣嫌を取つて見る母では無ささうて、實はさうで無い。時と場合で其なことは如何にでも。

『助の顏色が如何も可くないね。いつたい病身な兒だから餘程氣をつけないと不可ませんよ。』と云ひつゝ今度は自分の方を向いて、

『學校の方は如何だね。』

『如何も多忙しくつて困ります。今日もこれから寄附金のことで出掛ける處でした。』

『さうかね、私にかまはないでお出かけよ、私も今日は日曜だから悠然して居られない。』

『さうでしたね、日曜は兵隊が澤山來る日でしたね。』と自分は何心なく言つた。すると母、やはり氣がとがめるかして、少し氣色を更へ、音がカンを帶びて、

『なに私どもの處に下宿して居る方は曹長樣ばかりだから、日曜だつて平常だつてそんなに變らないよ。でもね、日曜は兵が遊びに來るし、それに矢張上に立てば酒位飲まして返すからね自然と私共も忙がしくなる勘定サ。軍人は如何しても景氣が可いね。』

『さうですかね。』と自分は氣の無い挨拶をしたので、母は愈々氣色ばみ。

『だつて左じやないかお前、今度の戰爭だつて日本の軍人が豪いから何時も勝つのじやないか。軍人あつての日本だアね、私共は軍人が一番すきサ。』

この調子だから自分は遂に同居說を持だすことが出來ない。まして品行の噂でも爲て、忠告がましいことでも言はうものなら、母は何と言つて怒鳴るかも知れない。妻が自分を止めたも無理でない。

『學校の先生なんテ、私は大嫌いサ、ぐず／＼して眼ばかりパチつかして居る處は蚊を捕へ損なつた疣蛙見たやうだ。』とは曾て自分を罵しつた言葉。

疣蛙が出ない中にと、自分は、

『ちよつと出て來ます、御悠寬』とこそ／＼出てしまつた。何と意氣地なき男よ！

思へば母が大意張で自分の金を奪ひ、遂に自分を不幸のドン底まで落したのも無理はない。自分達夫婦で最初から母に呑れて居たので、母の爲ることを怒り、恨み、罵

しつては見る者の、自分達の力では母を如何することも出來ないのであつた。

酒を飲まない奴は飲む者に凹まされると決定つて居るらしい。今の自分であつて見ろ！文句がある。

『母上さん、そりやア貴女軍人が一番お好きでしやうよ。』とじろり其横顔を見てやる。母のことだから、

『オヤ異なことを言ふね、も一度言つて御覧。』と眼を釣上げて詰寄るだらう。

『御氣に觸はつたら御勘辨。一ッ差上げましやう。』と杯を奉まつる。『草葉の蔭で父上が……』とそれからさはりて行く處だが、彼の時は如何して彼の時分はあんなに野暮天だつたらう。

濱を誰か唸つて通る。彼の節廻しは吉次だ。彼奴聲は全たく美いよ。

○○○
五月十日

外から歸たのが三時頃であつた。妻は突伏して泣いて居る。

『如何したのだ、如何したの？』と自分は驚ろいて訊いたが、お政のことゆゑ、泣くばかりで容易に言ひ得ない。泣くのは此女の持前で、少しの事にも涙をこぼす。然し今度のは餘程のことが有つたと見えて、自分が聞けば聞くほど益々泣入ばかり。かうなると自分は狼狽へざるを得ない。水を持て來てやりなどすると漸くのことで詳はしく事條が解つた。

お政の苦心は十分母の満足を得なかつたのである。折角の帶も三圓にしかならず、仕方なしにお政は自分の出て行つた後で此三圓を母に渡すと、母は大立腹。二人の問答は次のやうであつた。

『五圓と言つて來たのだよ。』

『でも只今これだけしか無いのですから……』

『だつて先刻用意してあると言つたじやないか。』

『ですから三圓だけ漸々作らへましたから……。』

『さうお。漸々作らへてお呉だつたのか。お氣の毒でしたね、色々御心配をかけて。必定七屋からでも持て來たお金でしやう。そんな思のとッ着いた金なんか借りたくないよ。何だね人面白くも無い。可いよ今藏が歸つて來るの待つて居るから。今藏に言ふから。』

『イヽえ主人ては知らないのですから……』

『オヤ今藏は知らないの？　驚いた、それじやお前さんが內證でお貸なの。嘘を吐きなさんな、嘘を。今藏の奴必定三圓位で追返せとか何とか言つたのだらう。だから自分は私を避けて出て行つたのだらう。可いよ、待つてるから。晚までだつて待つて居てやるから。』

『宅のは全く、全く知らないので……』と妻は泣いて口がきけない。

『泣かないでも可いじやアないか。お前さんは亭主の言ひつけ通り爲たのだから可いじやアないか。フン何ぞと言ふと直ぐ泣くのだ。どうせ私は鬼婆だから私が何か言ふと可怕いだらうよ。』

何と言はれても一方は泣くばかり、母は一人で並べて居る。

『だから出來なきや出來ないと言つて寄こせば可いんだ。新町から青山くんだりまで三圓ばかしのお金を取りに來るやうな暇はない身體ですよ。意氣地がないから親一人妹一人養ふことも出來ずさ、下宿屋家業までさして置いて忠孝の道を兒童に敎へるなんて、隨分變つた先生樣もあるものだね。然しお政さんなんぞは幸福さ、いくら親に不孝な男でも女房だけは可愛がるからね。お光などのやうに兵隊の氣嫌まで取て漸々御飯を戴いていく女もあるから、お前さんなんぞ決して不足に思つちやなりませんよ。』

皮肉も言ひ盡して、暫らく烟草を吹かしながら坐つて居たが、時計を見上げて、

『どうせ避けた位だからちよつくら歸つて來ないだらう。歸りましやう、私も多忙しい身體だからね。お客樣に御飯を上げる仕度も爲なければならんし。』と急に起上がつ

て

『紙と筆を借りるよ。置手紙を書くから。』と机の傍に行つた。

此時助が劇しく泣きだしたので、妻は抱いて庭に下りて生垣の外を、自分も半分泣きながら、ぶら〳〵歩るいて兒供を寢かしつけやうとして居た。暫くすると急に母は大聲で

『お政さん！お政さん！』と呼んだ。妻は座敷に上がると母は眼に角を立て睨むやうにして

『お前さんまで逃げないても可いよ。人を馬鹿にしてらア。手紙なんぞ書かないから、歸つたら左う言つてお呉れ。此三圓も不用いよ。』と投げだして『最早私も決して來ないし、今藏も來ないが可い、親とも思ふな、子とも思はんからと言つてお呉れ！』

非常な劍幕で母は立ち去り、妻は其まゝ泣伏したのであつた。

自分は一々聽き終はつて、今の自分なら、

『宜しい！不用けや三圓も上げんばかりだ。泣くな、泣くな、可いじやないか母上さんの方から母でもない子でも無いといふのなら、致かたもないさ。無理も大概にして貰はんとな。』

然し彼の時分はさうでなかつた。不孝の子であるやうに言はれて見ると甚どく其が氣にかゝる。氣にかゝるといふには種々の意味が含んで居るので、世間體もあるし、敎員といふ第一の資格も缺けて居るやうだし、即ち何となく心に安んじないのであるそれに三圓といふことは自分も知らなかつたのだ、其點は此方が惡いやうな氣もするので、

『困つたものだ』と腕組して暫く嘆息をして居たが、

『自分で勝手に下宿屋を行つて居ながら、そんなことを言はれて見ると、全然私共が惡いやうに聞える。可いよ、私が今夜行つて來やう。そして三圓だけ渡して來る。

〇〇〇〇

五月十一日

今日は朝から雨降り風起りて、湖水のやうな海も流石に波音が高い。山は鳴つて居る。

今夜はお露も來ない。先刻まで自分と飲んで居た若者も歸つてしまつた。自分は可い心持に醉うて居る。醉うては居るもの丶如何も孤獨の感に堪へない。要するに自分は孤獨である。

人の一生は何の爲だらう。自分は哲學者でも宗教家でもないから深い理屈は知らないが、自分の今、今といふ今感ずる所は唯だ儚さだけである。

如何も人生は儚いものに違ひない。理屈は抜にして眞實の處は儚いものらしい。

若し果敢いものでないならば、たとひ人は如何な境遇に墮るとて自分が今感ずるやうな深い深い悲哀は感じない筈だ。

親とか子とか兄弟とか、朋友とか社會とか、人の周圍には人の心を動かすものが出來て居る。まぎらす者が出來て居る。若しこれ等が皆な消え去せて山上に樹つて居る

一本松のやうに、たゞ一人、無人島の荒磯に住んで居たらどうだらう。風は急に雨は暗く海は怪しく叫ぶ時、人の生命、此地の上に住む人の一生を樂しいもの、望あるものと感ずることが出來やうか。

だから人情は人の食物だ。米や肉が人に必要物なる如く親子や男女や朋友の情は人の心の食物だ。これは比喩でなく事實である。

だから土地に肥料を施す如く、人は色々な文句を作つて此等の情を肥かうのだ。

さうして見ると神樣は甘く人間を作つて御座る。てはない人間は甘く猿から進化して居る。

オヤ！戸をたゝく者がある、此雨に。お露だ。可愛いお露だ。

さうだ。人間は甘く猿から進化して居る。

○○○○

五月十二日

心細いことを書いてる中にお露が來たので、昨夜は書き續きの本文に取りかゝらな

かつた。さて――

　若しお政が氣の勝て居る女ならば、自分が其夜三圓持て母を尋ねると言へば、『質屋から持つて來たお金なんか厭だと被仰つたのだから持て行かなくつたつて可う御座いますよ。』と言ひ放つて口惜し涙を流す處だが、お政にはそれが出來ない。母から厭味や皮肉を言はれて泣いたのは唯ゞ悲くつて泣いたので、自分が優しく慰さむれば心も次第に靜まり、別に文句は無いのである。

　處で母は百圓盜んで歸つた。自分は今これを冷やかに書くが、机の抽斗を開けて見て百圓の紙包が紛失して居るのを知つた時は『オヤ！』と叫けんだきり容易に二の句が出なかつた。

『お前此抽斗を開けや爲なかつたか。』

『否』

『だつて先刻入れて置いた寄附金の包みが見えないよ。』

『まア！』と言つて妻は眞蒼になつた。自分は狼狽て二の抽斗を抽き放つて中を一々驗ためたけれど無いものは無い。

『先刻母上さんが置手紙を書くつてお開けになりましたよ！』

『さうだ！』と自分は膝を拍つた時、頭から水を浴たやう。崕を蹈外さうとした刹那の心持。

　自分は暫らく茫然として机の抽斗を眺めて居たが、我知らず涙が頰をつたうて流れる。

『餘り酷すぎる』と一語僅かに洩し得たばかり、妻は涙の泉も涸たか唯だ自分の顏を見て血の氣のない唇をわな／＼と戰はして居る。

『じやア母上さんが……』と言ひかけるのを自分は手を振つて打消し、

『默つてお居て、默つてお居て。』と自分は四圍を見廻して『これから新町まで行つて來る。』

『だつて貴所……。』

『否や、母上さんに會つて取返へして來る。餘りだ、餘りだ。親だつて此事だけは默つて居られるものか。然しどうして其な淺ましい心を起したのだらう……』

自分は涙を止めることが出來ない。妻も遂に泣きだした。夫婦途方に暮れて實に泣くばかり。思へば母が三圓投出したのも、親子の緣を切るなど突飛なことを怒鳴つて歸つたのも皆な其心が見えすく。

『直ぐ行つて來る。親を盜賊に爲ることが出來ない。お前心配しないで待てお居て、是非取りかへして來るから。』と自分は大急ぎて仕度し、手箱から亡父の寫眞を取り出して懷中した。

小春日和の日曜とて、青山の通りは人出多く、大空は澄み渡り、風は砂を立てぬほどに吹き、人々行樂に忙がしい時、不幸の男よ、自分は夢地を辿る心地て外を歩いた。自分は今も此時を思ひだすと、東京なる都會を惡む心を起さずには居られないのである。

東宮御所の横手まで來ると突然『大河君、大河君』と呼ぶ者がある。見れば齋藤といふ、これも建築委員の一人。莞爾しながら近づき、

『如何も相濟まん、僕は全然遊んで居て。寄附金は大概集まつたらうか。』

寄附金といはれて我知らずどぎまぎしたが『大略集まつた。』と僅に答へて直ぐ傍を向いた。

『廻る所があるなら僕廻つても可いよ。』

『難有う。』と言つたぎり自分が躊躇して居るので齋藤は不審さうに自分を見て居たが『イヤ失敬』と言つて去つた終つた。十歩を隔てゝ彼は振返つて見たに違ない。自分は思はず頸を縮めた。

母に會つたら、何と切出さう。新町に近づくにつれて、これが心配でならぬ。母から反對に怒鳴つけられたら、如何しやうなど思ふと、母の劍幕が目先に浮んで來て、

足は自と立縮む。『若し如何しても返さなかつたら』の一念が起らうとする時、自分は胸を壓つけられるやうな氣がするので其一念を打消し打消し歩いた。

『大河とみ』の表札。二階建、格子戸、見た處は小官吏の住宅らしく。女姓名だけに金貸でも爲さうに見える。一度は引返へして手紙で言はうかとも思つたが、何しろ一大事と、自分は思切つて格子戸を潛つた。

○○○○

五月十三日

勝手の間に通つて見ると、母は長火鉢の向うに坐つて居て、可怕い顏して自分を迎へた。鐵瓶には德利が入れてある。二階は兵士どもの飲んで居る最中。然し思つたより靜で、妹お光の浮いた笑聲と、これに伴ふ男の太い聲は二人か三人。母はじろり自分を見たばかり一言も言はず、大きな聲で、

『お光、お銚子が出來たよ。』と二階の上口を向いて呼んだ、『ハイ』とお光は下て來て自分を見て、

『オヤ兄樣』と言つたが笑ひもせず、唯だ意外といふ顏付き、其風は赤いものずくめ、如何見ても居酒屋の酌婦としか受取れない。母の可怕い顏と自分の眞面目な顏とを見比べて居たが、

『それからね母上さん、お鮨を取つて下さいつて。』

『さう。幾價ばかり?』

『幾價だか。可い加減で可いてしやう。それから母上さんにもお入なさいつて。』

『あア』と母は言つて妙な眼つきでお光の顏を見たが、お光は其儘自分の方は見向もしないで二階へ上つて了まつた。自分は唯だ坐わつたきり、母の何とか言ひだすのを待つて居た。

『何しに來たの』と母は突慳貪に一言。

『先刻は失禮しました。』と自分は出來るだけ氣を落着けて左あらぬ體に言つた。

『いゝえ如何しまして。色々心配をかけて濟なかつたね。』歸る時お政さんに言つて置

いたことがあるが聞いてお呉れだつたかね？』と何處までも冷やかに、憎々しげに言ひながら起上がつて『私はお客様の用で出て來るが、用があるなら待つて居てお呉れ』と臺所口から出て去つて了つた。

　自分は腕組みして熟つとして居たが、我母ながら之れ實に惡婆であるとつく〴〵情なく、あゝまで濟まして居る處を見ると、言つたところで、無益だと思うと寧そのこと公けの沙汰にして終はうかとの氣も起る。然し現在の母が子の抽斗から盜み出したので、假令公金であれ、子の情として訴たへる理由には如何してもゆかない。訴たへることは出來ず、母からは取返へすことも出來ないなら、竊かに自分で辨償するより外の手段はない。八千圓ばかりの金高から百圓を帳面で胡魔化すことは、たとひ自分に爲し得ても、直ぐ後で發覺る。又自分には左る不正なことは思つて見るだけでも身が戰へるやうだ。自分が辨償するとして其金を自分は何處から持て來る？

　思へば思ふほど自分は如何して可いか解らなくなつて來た。これは如何なことでも

母から取返へす外はと、思ひ定めて居ると母は外から歸つて來て、無言で火鉢の向に坐つたが、

『如何だね、聞いてお呉れだつたかね？』と言つて長い烟管を取上げた。

『何をですか。』と自分は母の顏を見ながら言つた。

『まア可いサ聞かなかつたのなら。然しお前の用といふのは何だね？』

　自分は懷中から三圓出して火鉢の横に置き、

『これは二圓不足して居ますが、折角お政が作らへて置いたのですから。取つて下さい、さう爲ませんと……』

『最早不用ないよ。だから私も二度とお前達の厄介にはなるまいし。お前達も私のやうなものは親と思はないが可い。その方がお前達のお德じやアないか。』

『母上さん。貴女は何故そんなことを急に仰被るのです。』と自分は思はず涙を呑んだ。

『急に言つたのが惡けりや謝まります。さうだつたね、一年前位に言つたらお前達も

幸福だつたのに。』

　何といふ皮肉の言葉ぞ、今の自分ならば決然と、

『さうですか、宜しう御座います、それじや御言葉に従がひまして親とも思ひますまい、子とも思つて下さいますな。子とお思ひになると飛だお恨みを受けるやうな事も起るだらうと思ひますから。就いては今日 私の机の抽斗に百圓入れて置きました其が、貴女のお歸りになると同時に紛失したので御座いますが、如何がでしやう、若しか反古と間違つてお袂へでもお入になりませんてしたらうか、一應お聞申します。』と腹から出た聲を使つて、グッと急所へ一本。

『何だと親を捕へて泥棒呼はりは聞き捨てになりませんぞ。』と來る所を取つて押へ、片頰に笑味を見せて、

『これは異なこと！ 親子の縁は切れてる筈でしやう。イヤお持歸りになりませんなら其で可う御座います、右の次第を届け出るばかりですから。』と大きく出れば、いかな

母でも半分落城する所だけれど、彼の時の自分に何でこんな芝居が打てやう。

　悪々しい皮肉を聞かされて、グッと行きづまつて了ひ、手を拱んだまゝ暫時は頭も得あげず、涙をほろ〳〵こぼして居たが、

『母上さん、それは餘りで御座います。』とやう〳〵に一言、母は何所までも上手、

『何が餘だね。それは此方の文句だよ。チョッ泣蟲が揃つてら。面白くもない！』

　自分は形無し。又も文句に塞つたが、氣を引きたてゝ父の寫眞を母の前に置きながら

『父上さんをお伴れ申してのお願で御座います。母上さん、何卒……お返しを願ひます、それでないと私が……』と漸との思で言ひだした。母は直ぐ血相變て、

『オヤそれは何の眞似だえ。を可笑なことをお爲だねえ。父上さんの寫眞が何だといふの？』

『どうか左う被仰らずに何卒お返しを。今日お持返へりの物を……』

『先刻からお前可笑なことを言ふね、私お前に何を借りたえ？』

『何にも申しませんから、何卒左う被仰らずにお返しを願ひます、それてないと私の立つ瀬がないのですから……』と言はせも果てず母は火鉢を横に膝を進めて、

『怪しからんことを言ふよ、それては私が今日お前の所から何か持つてでも歸つたと言ふのだね、聞き捨てになりませんよ。』と聲を高めて乘掛る。

『ま、ま、さう大きな聲で……』と自分はまご〳〵。

『大きな聲が如何したの、いくらでも大きな聲を出すよ……さア今一度言つて御覽ん。事とすべに依ればお光も呼んで立合はすよ。』といふ劍幕。此時二階の笑聲もぴたり止んで、下を覗がひ聞耳をたてゝ居る樣子。自分は狼狽へて言葉が出ない。もぢもぢして居ると臺所口で『お待遠さま』といふ聲がした。母は、

『お光、お光お鮨が來たよ。』と呼んだ。お光は下りて來る。格子が開いたと思ふと『今日は』と入つて來たのが一人の軍曹。自分をちよつと尻目にかけ、

『御馳走樣』とお光が運ぶ鮨の大皿を見ながら、ひよろついて尻餅をついて、長火鉢の横にぶつ坐つた。

『おやまあ可いお色ですこと。』と母は今自分を睨みつけて居た眼に媚を浮べて『何處て。』

『ハッハッ……其は軍事上の秘密に屬します。』と軍曹酒氣を吐いて『お茶を一ぱい頂戴。』

『今入れて居るじやありませんか、性急ない兒だ』と母は湯呑に充滿注いでやつて自分の居ることは、最早忘れたかのやう。二階から大聲で、

『大塚、大塚！』

『貴所下りてお出でなさいよ。』と母が呼ぶ。大塚軍曹は上を向いて、

『お光さん、お光さん！』

外所は豆腐屋の賣聲高く夕暮近い往來の氣勢。とても此樣子ではと自分は急に起て

歸らうとすると、母は柔和い聲で、

『最早お歸りかえ。まア可いじやアないか。そんなら又お來でよ。』と軍曹の前を作ろつた。

外へ出たが直ぐ歸へることも出來ず、さりとて人に相談すべき事ではなく、身に降りかゝつた災難を今更の如く悲しんで、氣拔けした人のやうに當もなく歩いて溜池の傍まで來た。

全たく思案に暮れたが、然し何とか思案を定めなければならぬ。日は暮れかゝり夕飯時になつたけれど何を食うとも思はない。

ふと山王臺の森に烏の群れ集まるのを見て、暫く彼處のベンチに倚つて靜かに工夫しやうと日吉橋を渡つた。

哀れ氣の毒な先生！『見すぼらしげな後影』と言ひたくなる。酒、酒、何て彼の時、蕎麥屋にても飛込んで、景氣よく一二本も倒さなかつたのだらう。

○○○○○五月十四日

寂寥として人氣なき森蔭のベンチに倚つたまゝ、何時間自分は動かなかつたらう。日は全く暮れて四圍は眞暗になつたけれど、少しも氣がつかず、たゞ腕組して折り折り嘆息を洩すばかり、ひたすら物思に沈んで居たのである。

實地に就ての益に立つ考案は出ないで、斯うなると種々な空想を描いては打壞はし、又た描く。空想から空想、枝から枝が生へ、殆んど止度がない。

痴情の果から母とお光が軍曹に殺ろされる。と一つ思ひ浮かべると其悲劇の有樣が目の先に浮んで來て、母やお光が血だらけになつて逃げ廻る樣がありありと見える。今藏々々と母は逃げながら自分を呼ぶ、自分は飛び込んで母を助けやうとすると、一人の兵が自分を捉へて動かさない……アッと思ふと此空想が破れる。

自分が百圓持つて銀行に預けに行く途中で、掏兒に取られた體にして屆け出やう、さう爲ようと考がへた、すると嫌疑が自分にかゝり、自分は拘引される、お政と助は

拘引中に病死するなど又々淺ましい方に空想が移つる。

校舍落成のこと、其落成式の光景、升屋の老人のよろこぶ顏までが目に浮んで來る。

あゝ百圓あつたらなアと思ふと、これまで金錢のことなど左まで自分を惱ましたことのないのが、今更の如く其怪しい、恐ろしい力を感じて來る。たゞ百圓、その金錢さへあれば、母も盜賊にはなるまいものを。よし母は盜みを爲た處で、自分に其金錢が有るならば今の塲合、自分等夫婦は全く助かるものをなど考がへると、金錢といふ者が欲くもあり、惡くもあり、同時に其金錢のために少くも惱まされないで、長閑かに此世を送つて居る者が羨ましくもなり、又實に憎々しくもなる。總て是等の苦々しい情は、これまで勤勉にして信用厚き小學敎員、大河今藏の心には起つたことはないので、あゝ金錢が欲しいなアと思はず口に出して、熟と暗い森の奧を見つめた。

するとがや〳〵と男女打雜じつて、ふざけながら上つて來るものがある。

『淋しいじや有りませぬか、歸りましようよ。最早こんな處つまりませんわ。』といふ

女の聲は確にお光。自分はぎよつとして起あがらうとしたが、直ぐ其處に近づいて來たので其儘身動きもせず樣子を窺がつて居た。人々は全たく此處に人あることを氣がつかぬらしい。お光が居れば母もと覗がつたが女はお光一人、男は二人。

『ねえ最早歸りましようよ、母上さんが待つて居るから。』と甘つたるい聲。

『何故母上さんは一所に出なかつたのだらう、君知らんかね。』と一人の男が言ふと、一人

『頭が痛むとか言つて居たつけ。』といふや三人急に何か小さな聲で囁き合つたが、同時にどつと笑ひ、一人が『ヨイショー』と叫けんで手を拍つた。

面白ろうない事が至る處、自分に着纏つて來る。三人が行き過ぐるや自分は舌打して起ちあがり、そこ〳〵と山を下りて表町に出た。

此上は明日中に何とか處置を着ける積り、一方には手紙で母に今一度十分訴たへて見、一方には愈々といふ最後の處置は如何するか妻とも能く相談しやうと、進まぬな

がらも東宮御所の横手まで來て、土手について右に廻り青山の原に出た。原を横ぎる方が近いのである。

原を横ぎる時、自分は一個の手提革包を拾つた。

○○○○

五月十五日

如何して手提革包を拾つたか其手續まで詳はしく書くにも當るまい。たゞ拾つたので、足にぶつかつたから拾つたので、拾つて取上げて見ると手提革包であつたのである。

拾うと直ぐ、金錢！といふ一念が自分の頭にひらめいた。占たと思つた、そして何となく夢ではないかとも思つた。といふものは實は山王臺で種々の空想を描いた時、若し千兩も拾つたらなど、恥かしい事だが考へたからで、それが事實となつたらしいからである。革包は容易く開いた。

紙幣の束が三ツ、他に書類などが入つて居る。星光にすかしてこれを見た時、其時

自分は全たく夢ではないかと思つたゞけて、それを自分が屆け出るとか、横奪することが破廉恥の極だとか、さういふことを考へることは出來なかつた。たゞ手短かに天の賜と思つた。

不思議なもので一度、良心の力を失なうと今度は反對に積極的に、不正なこと、思ひがけぬ大罪を成るべく爲し遂んと務めるものらしい。

自分はそつと此革包を私宅の横に積である材木の間に、而も巧に隱匿して、紙幣の一束を懷中して素知らぬ顔をして宅に入つた。

自分の足音を聞いただけて妻は飛起きて迎へた。助を寢かし着けて其まゝ横になつて自分の歸宅を待ちあぐんで居たのである。

『如何がてした。』と自分の顔を見るや。

『取り返して來た！』と問はれて直ぐ。

この答も我知らず出たので、嘘を吐く氣もなく吐いたのである。

既に斯うなれば自分は全たくの孤立。母の秘密を保つ身は自分自身の秘密に立籠らねばならなくなつた。

『まア如何して？』と妻のうれしさうに問のを苦笑で受けて、手輕く、

『能く事わけを話したら渡した』とのみ。妻は猶ほ其樣子まで詳しく聽きたかつたらしいが自分の進まぬ風を見て、別に深くも訊ねず、

『どんなに心配しましたらう。若しも渡さなかつたらと思つて取越苦勞ばかり爲てゐました。』と萬斤の重荷を卸ろしたよろこび。自分は懷に片手を入れて一件を握つて居たが未だ夢の醒めきらぬ心地がして茫然として居る。

『御飯は？』

『食つて來た。』

『母上さんの處で？』

『あア』

『大變お顏の色が惡う御座いますよ。』と妻は自分の顏を見つめて言ふ。

『餘り心配したせいだらう。』

『直ぐお寢みなさいな。』

『イヤ帳簿の調査もあるからお前先へ寢てお呉れ。』と言つて自分は八疊の間に入り机に向つた。然し妻は容易に寢さうもないので、

『早くお寢みといふに。』

自分はこれまで、これほどの角のある言葉すら妻に向つて發したことはないのである。妻は不審さうに自分の方を見て居るやうてあつたが、其中床に就てしまつた。自分は一度特更に火鉢の傍に行つて烟草を吸つて、間の襖を閉め切つて、漸く秘密の左右を得た。

懷からそつと盜すむやうにして紙幣の束を出したが、其樣子は母が机の抽斗から、紙幣の紙包を出したのと同じてあつたらう。

一圓紙幣で百枚！全然注文したやう。これを數へる手はふるへ、數へ終つて自分は洋燈の火を熟と見つめた。直ぐこれを明日銀行に預けて帳簿の表を飾らうと決定たのである。

又盗すまれてはと、箪笥に納うて錠を卸ろすや、今度は提革包の始末。これは妻の寢静まつた後ならではと一先素知らぬ顔で床に入つた。

床に入つて眼を閉ぢて居る時、この時には多少か良心の眼は醒めさうなものだが、實際はさうでなかつた。魔が自分に投げ與へた一の目的の爲めに、良心ならぬ猛烈の意志は冷やかに働らいて、一に妻の鼻息を覗かがつて居る。斯うして二時間經ち、十二時が打つや、蒼い顔のお政は死人のやうに横たはつて居るのを見屆けて、前夜は盗賊を疑がうて床を脱け出た自分は、今度は自身盗賊のやうに前夜よりも更に靜に、更に巧に、寢間を出て、椽の戸を一分又た一分に開け、跣足で外面に首尾能く出た。

星は冴へに冴え、風は死し、秋の夜の靜けさ、虫は鳴きしきつて居る。不思議なる

は自分が、此時かゝる目的の爲に外面に出ながら、外面に出て二歩三歩あるいて暫時佇立んだ時この寥々として靜肅且つ壯嚴なる秋の夜の光景が身の毛もよだつまでに眼に沁こんだことである。今も其時の空の美しさを忘れない。そして見ると、善にせよ惡にせよ人の精神凝つて雜念の無い時は、外物の印象を受る力も亦た强い者と見える。

材木の間から革包を取出し、難なく座敷に持運んで見ると、他の二束も同じく百圓束、都合三百圓の金高が入つて居たのである。書類は請取の類。薄い帳面もあり、名刺もある。遺失した人は四谷區何町何番地日向某とて穀類の問屋を業として居る者といふことが解つた。

心の弱い者が惡事を働いた時の常として、何かの言譯を自分が作らねば承知の出來ないが如く、自分は右の遺失た人の住所姓名が解るや直ぐと見事な言譯を自分で作つて、そして殆ど一道の光明を得たかのやうに嬉こんだ。

一先拜借！一先拜借して自分の急場を救つた上て、其中に母から取返すとも、自分

て工夫して金を作るとも、何とでもして取つた百圓を再び革包に入れ、其まゝ人知れず先方に屆ける。

天の賜とは實にこの事と、無上によろこび、それから二百圓を入れたまゝの革包を隱す工夫に取りかゝつた。然し元來狹い家だから別に安全な隱くし場の有らう筈がない。思案に盡きて終に自分の書類、學校の帳簿などばかり入て置く箪笥の抽斗に入れて其上に書類を重ねそして鍵は晝夜自分の肌身より離さないことに決定て漸つと安心した。

床に就たと思ふと二時が打ち、がつかりして直ぐ寢入つて終つた。

○○○○

五月十六日

忘れることの出來ない十月二十五日は過ぎた。翌日から自分は平時の通り授業もし改築事務も執り、表面は以前と少しも變らなかつた、母からも亦た何とも言つて來ず、自分も母に手紙で迫る事すら放棄して了ひ、一日一日と無事に過ぎゆいた。

然し自分は到底惡人ではない、又度胸のある男でもない。さればこそ母からも附込まれ、遂に母を盜賊にして了ひ、遂に自分までが賊になつてしまつたのである。であるから賊になつた上で又もや悶き初めるのは當然である。總て自分のやうな男は皆な同じ行き方をするので、運命といへば運命。蛙が何時までも蛙であると同じ意味の運命。別に不思議はない。

良心とかいふ者が次第に頭を擡げて來た。そして何時も身に着けて居る鍵が氣になつて堪らなくなつて來た。

殊に自分は兒童の敎員、又た倫理を受持つて居るので常に忠孝仁義を説かねばならず、善惡邪正を説かねばならず、言行一致が大切じやと眞面目な顏で説かねばならず、其度每に怪しく心が騷ぐ。生徒の質問の中で、折り〳〵胸を刺れるやうなのがある。中には自分の祕密を知つてあんな質問をするのではあるまいかと疑ひ、思はず生徒の面を見て直ぐ我顏を負向けることもある。或日の事、十歲ばかりの兒が來て、

『校長先生、岩崎さんが私の鉛筆を拾つて返しません。』と訴たへて來た。拾つたとか、失つたとか、落したとかいふ事は多數の兒童を集めて居ることゆゑ常に有り勝で怪むに足ないのが、今突然此訴へに接して、自分はドキリ胸にこたへた。

『貴所が氣をつけんから落したのだ、待てお居で、今岩崎を呼ぶから。』と言つたのは全然これまでの自分にないことで、兒童は喫驚して自分の顏を見た。

岩崎といふ十二歳になる兒童を呼んで『あなたは鉛筆を拾ひはしなかつたか』と聞くと顏を赤らめてもぢ／＼して居る。

『拾つたでしよう。他人の者を拾つたら直ぐ私の所へ持て出るのが當前だのに其を自分の者に爲るといふことは盜んだも同じことで、甚だ善くないことですよ。其鉛筆を直ぐ此人にお返しなさい。』と嚴かに命つけた。

そんならば何故自分は他人の革包を自分の箪笥に隱して置くのであるか。

自分は其日校務を了ると直ぐ宅に歸り、一室に屈居て、悶き苦しんだ。自首して出

やうかとも考がへ、夫れとも學校の方を辭職して了うかとも考がへた。此の二を撰ぶ上に就いて更に又苦しんだけれど、いづれとも決心することが出來ない。自首した後での妻子のことを思ひ、辭職した後での衣食のことを思ひ、衣食のことよりも更に自分を動かしたのは折角これまでに計營して校舍の改築も美々しく落成するものを捨て終うは如何にも殘念に感じたことである。

其處で一日も早く百圓の金を作るが第一と、今度はそれのみに心を碎いたが、當もなんにもない。小學教員に百圓の內職は荷が勝ち過ぎる。たゞ空想ばかりに耽つて居る。起きれば金錢、寢ても百圓。或日のことで自分は女生徒の一人を連れて郊外散歩に出た。其以前は能く生徒の三四人を伴ふて散歩に出たものである。

美しき秋の日で身も輕く、少女は唱歌を歌ひながら自分よりか四五歩先を左も愉快さうに跳ねて行く。路は野原の薄を分けてやゝ爪先上の處まで來ると、ちらと自分の眼に映つたは草の間から現はれて居る紙包。自分は駈け寄つて拾ひあげて見ると內に

百圓束が一個。自分は狼狽て懷中にねぢこんだ。すると生徒が、

『先生何に？』と寄つて來て問うた。

『何でも宜しい！』

『だつて何に？拜見な。よう拜見な。』と自分にあまへてぶら下つた。

『可けないと言ふに！』と自分は少女を突飛ばすと、少女は仰向けに倒れかゝつたので、自分は思はずアッと叫けんで之を支へようとした時、覺れば夢であつて、自分は晝飯後敎員室の倚子に凭れたまゝ轉寢をして居たのであつた。

拾つた金の穴を埋めんと悶いて又夢に金錢を拾ふ。自分は醒めた後で、人間の心の淺ましさを染々と感じた。

〇〇〇〇

五月十七日

妻のお政は自分の樣子の變つたのに驚ろいて居るやうである。自分は心にこれほどの苦悶のあるのを少しも外に見せないなどいふことの出來る男でない。のみならず若

し妻が此秘密を知つたなら如何しようと宅に在ては其が亦た苦勞の苦勞の一で、妻の顏を見ても、感付ては居まいかと其眼色を讀む。絕えずキョト／＼して、そは／＼して安んじないばかりか、心に爛た處が有るから何でもないことて妻に角立つた言葉を使うことがある。無言て一日暮すこともあり、自分の性質の特色ともいふべき溫和な人なつこひところは殆ど消え失せ、自分の性質の裏ともいふべき妙にひねくれた片意地の處ばかり潮の退た後の岩のやうに、ごつ／＼と現はれ殘つたので、妻が內心驚ろいて居るのも決して不思議ではない。

溫和て正直だけが取柄の人間の、其取柄を失なつたほど、不愉快な者はあるまい。澁を拔た柿の腐敗りかゝつたやうなもので、とても近よることは出來ない。妻が自分を面白からず思ひ氣味惡るう思ひ、そして欝いでばかり居て、折り／＼左も氣の無さゝうな嘆息を洩すのも決して無理ではない。

これを見るに就けて自分の心は愈々爛れるばかり。然し運命は永く此不幸な男女を

弄そばず、自分が革包を隱した日より一月目、十一月二十五日の夜を以つて大切と爲て呉れた。

此夜自分は學校の用で神田までゆき九時頃歸宅つて見ると、妻が助を背負つたまゝ火鉢の前に坐つて蒼い顔といふよりか凄い顔をして居る。そして自分が歸宅つても挨拶も爲ない。眼の邊には泣きたゞらした痕の殘つて居るのが明々地と解る。

此の様子を見て自分は驚いたといふよりか懼れた。懼れたといふよりか戰慄した。

『オイ如何したの？お前如何したの？』と急きこんで問ふたが、妻は其凄い眼で自分をぢろりと見たばかりで一語も發しない。ふと氣が着いて見ると、簞笥を入た押込の襖が開けて放して、例の秘密の抽斗が半分開いて居た。自分は飛び起つた。

『誰が開けたのだ』と叫けんで抽斗に手をかけた。

『私が開けました。』と妻の沈着き拂つた答。

『何故開けた、如何して開けた。』

『委員會から帳簿を借して呉れろと言つて來ましたから開けて渡しました。』とぢろり自分の顔を見た。

『何だつて私の居ないのに渡した、え何だつて渡した。怪からんことだ。』と喚きつゝ抽斗の中を見ると革包が出て居て而も口を開けたまゝである。

『お前これを見たな！』と叫けんで『可し私にも覺悟がある、覺悟がある』と怒鳴りながら其儘抽斗を閉めて錠を卸し、非常な劍幕で外面に飛び出して了まつた。

無我夢中で其處らを歩いて何時か青山の原に出たが矢張當もなく歩いて居る。けれども結局、妻に秘密を知られたので、別に覺悟も何にも無いのである。たゞ喫驚した餘りに怒鳴り、狼狽へた餘に喚いたので、外面に飛び出したのは逃げ出したるに過ぎない。

であるから歩るいて居る中に次第に心が靜まつて來た。斯うなつては何もかも妻に打明けて、この先のことも相談しよう、さうすれば却つて妻と自分との間の今の面白

ろくない有樣から逃れ出ることも出來ると、急いで宅に歸つた。

何故そんならば革包を拾つて歸つて時に相談しなかつた。と問ふを止めよ。大河今藏の筆法は萬事これなのである。

歸つて見ると妻の姿が見えない。見えないも道理、助を背負たまゝ裏の井戸の中に死で居た。

お政はこれまで決して自分の錠を卸して置いた處を開けるやうなとは爲なかつた。然し何時か自分の擧動で簞笥の中に秘密のあることを推し、帳簿を取りに寄こされたを幸に無理に開けたに相違ない。鍵は用簞笥のを用ゐたらしい。革包の中を見て如何なにか鷩いたらう。思ふに自分が盜んだものと信じたに違ひない。然し書置などは見當らなかつた。

何故死んだか。唯一人この秘密を知る者はない。升屋の老人の推測は、お政の天性憂欝である上に病身で兎角健康勝れず、其が爲に氣がふれたに違いないといふことで

ある。自分の秘密を知らぬものゝ推測としては之が最も當つて居るので、お政の天性と羸弱なことは確に幾分の源因を爲して居る。若しこれが自分の母の如きであつたなら決して自殺など爲ない。

自分は直ぐ辭表を出した。言ふまでもなく非常に止められたが遂には、此場合無理もない、強て止めるのは却つて氣の毒と、三百圓の慰勞金で放免して呉れた。

實際自分は放免して呉れると否とに關らず、自分には最早何を爲る力も無くなつて了つたのである。人々は死だ妻よりも生き殘つた自分を憐れんだ。其處で三百圓といふ類稀なる慰勞金まで支出したので、升屋の老人などの發起に成つたのである。

妻子の葬儀には母と妹も來た。そして人々も當然と思ひ、二人も當然らしく擧動つて。自分は母を見ても妹を見ても、普通の會葬者を見るのと何の變もなからた。

三百圓を受けた時は嬉しくもなく難有くもなく又厭とも思はず。其中百圓を葬儀の經費に百圓を革包に返し、殘の百圓及び家財家具を賣り拂つて金を旅費として飄然と

東京を離れて了つた。立つ前夜密に例の手提革包を四谷の持主に送り届けた。

何時自分が東京を去つたか、何處を指して出たか、何人も知らない、母にも手紙一つ出さず、建前が濟んで内部の雜作も半ば出來上つた新築校舍にすら一瞥も與れないで夜竊かに迷ひ出たのである。

大阪に、岡山に、廣島に、西へ西へと流れて遂に此島に漂着したのが去年の春。

妻子の水死後全然失神者となつて東京を出てこの方幾度自殺しやうと思つたか知れない。衣食のために色々の業に從がひ、種々の人間、種々の事柄に出會ひ、雨にも打たれ風にも揉れ、往時を想ふて泣き今に當つて苦しみ、そして五年の歳月は澱みながらも絶ず流れて遂に此の今の泡の塊のやうな輕石のやうな人間を作り上たのてある。

三年前までは死んだ赤兒の泣聲がやゝもすると耳に着き、蒼白い妻の水を被つた凄い姿が眼の先にちらついたが、酒のお蔭で遂に追拂つて了つた。然し今でも眞夜中に。。ふと眼を醉ますと酒も大暑醒めて居て、眼の先を兒を背負つたお政がぐる〳〵廻つて

遠くなり近くなり遂に暗の中に消えるやうなことが時々ある。然し別に可怕しくもない。お政も今は横顏だけ自分に見せるばかり。思ふに遠からず彼方向いて去つて了うだらう。不思議なことには眞面目にお政のことを想ふ時は決して其淺ましい姿など眼に浮ばないで現はれる時は何時も突然である。

可愛いお露に比べて見るとお政などは何でもない。母などは更に何でもない。

。。。。

五月十九日

作夜は六兵衛が來て遲くまで飮んだ。六兵衛の言ひ草が面白いでないか

『お露を妻に持なせえ。』

『持つても可いなあ。』

『持ても可ゑなんチウことは言はさん、あれほど可愛いがつて居つて未だ文句が有るのか。』

『全く彼の女は可愛いよ、何故斯う可愛いだらう、かゝかゝ……』

『先方でも其えに言ふてら、如何で斯う先生が可愛いのか解らんチウて。』

『左やうさ、私見たやうな男の何處が可いのかお露は無暗と可愛いがつて呉れるが妙だ。これは私にも解らんよ。』

『さうで無えだ、先生のやうな人は誰でも可愛がりますぞ。お露が可愛がるのは無理が無えだ。』

『ハヽヽ、何故や、何故や。』

『何故チウて問はれると困まるが、一口に言ふと先生は苦勞人だ。それで居て面白ろい處があつて優しいところがあるだ。先生と斯う飲んで居ると私でも四十年も前の情話でも爲て見たくなる、先生なら默つて聽いて呉れさうに思はれるだ。島中先生を好んものは有りましねえて。お露や私を初め。』

自分は如何して斯う老人の氣に入るだらう。老人といへば升屋の老人は今頃誰を對手に碁を打つて居ることやら。

六兵衛は又斯う言つた

『先生は一度妻を持たことが有るに違いなからう。』

『如何して知れる。』

『如何してチウて、それは老人の眼には知れる。』

『全く有つたよ、然し餘程以前に死て了つた。』

『ハアそれは氣の毒なことをなされました。』

『けれどもね六兵衛さん、死だ妻はお露ほど可愛くなかつたよ、何でも無つたよ。』

『それは不實だ。先生もなか〳〵浮氣だの、新らしいのが可えだ。』と言つて老人は笑つた。

自分も唯だ笑つて答へなかつた。不實か浮氣か、そんなことは知らない。お露は可愛い。お政は氣の毒。

酒の上の管ではないが、夫婦といふものは大して難有いものでは無い。別してお政

なんぞ、あれは升屋の老人が呉れたので、呉れたから貰つたので、貰つたから子が出來たのだ。

母もさうだ、自分を生んだから自分の母だ、母だから自分を育てたのだ。そこで親子の情があれば眞實の親子であるが、無ければ他人だ。百圓盗んで置きながら親子の緣を切るなど文句が面白ろい。初から他人なのだ。

自分は小供の時から母に馴染まなんだ。母も自分には極て情が薄かつた。

明日は日曜。同勢四五人舟で押出す約束であるが、お露も連れこみたいものだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

大河今藏の日記は以上にて終りぬ。彼は翌日誤つて舟より落ち遂に水死せるなり。醉に任せ起つて踊り居たるに突然水の面を見入りつ、お政々々と連呼して其まゝ顚落せるなりといふ。

記者去年歸省して舊友の小學校敎員に會ふ、此日記は彼の手に秘藏され居たるなり。

馬島に哀れなる少女あり大河の死後四月にして兒を生む、これ大河が片身、少女はお露なりとぞ。

猶ほ友の語る處に依れば、お露は美人ならねども其眼に人を動かす力あふれ、小柄なれども强健なる體格を具へ、島の若者多くは心ひそかに之を得んものと互に爭ひ居たるを、一度大河に少女の心移りや、皆大河のためにこれを祝して敢て嫉もの無かりしといふ。

お露は兒のために生き、兒は島人の何人にも抱かれ、大河は其望む處を達して島の奥、森蔭暗き墓場に眠るを得たり。

記者思ふに不幸なる大河の日記に依りて大河の總を知ること能はず、何となれば日記は則ち大河自身が書き、而して其日記には彼が馬島に於ける生活を多く誌さざればなり。故に余輩は彼を知るに於て、彼の日記を通して彼の過去を知るは勿論、馬島に於ける彼が日常をも推測せざる可らず。

記者は彼を指して不幸なる男よといふのみ、其他を言ふに忍びず、彼も亦た自己を憐れみて、やゝもすれば曰く、あゝ不幸なる男よと。

酒中日記とは大河自から題したるなり。題して酒中日記といふ既に悲慘なり、况んや實際彼の筆を採る必ず醉後に於てせるをや。此日記を讀むに當て特に記憶すべきは實に又この事實なり。

お政は兒を負ふて彼に先ち、お露は彼に殘されて兒を負ふ。何れか不幸、何か悲慘。

馬上の友

『君、最早寢るのか？』と今しも當直を終て士官室に入つて來た一人の大尉が、自分に問ふた。

『寢るには早し、起きて居ても對話者はなし、困つて居た處サ。』と自分は起かけて居た腰を更にソファに卸して『それとも何か珍談が有るかね？。』

『大ありだ、まア話したまへ。』と言ひつゝ大尉は手早く外套の頭布を脫ぎ、卷いて居た白い毛糸の頸卷を外し、ハンケチで顏を磨りながら『鼻の先の感覺が無なつて了つた。恐しい風だ。ボーイ！』聲に應じて使童室の小窓が開き、眠むさうな眼つきをした水兵の顏が現はれた。

『湯が沸てるなら、一本熱くして吸れ。出來なけアウイスキーを持て來い！』と彼は命じた。

時は明治二十七年十二月の末、我國の艦隊が大連灣に集合して榮城灣上陸の準備の整ふのを待つて居た頃である。自分は新聞記者、大尉は兼て自分と仲よく話して話も能く合ふ士官の一人である。

ボーイはウイスキーを持て來た。大尉は自分にも杯を差して

『是非君に聞いて貰ひたい珍談があるのだ。』と頗る愉快げに言つて彼は其杯を干し

『聽いて呉れるか？』

『聽くとも、話したまへ。』

夜は更けて一艦の人、其職に在るもの丶外は悉く寢て了ひ、朔風帆綱をたゝいて艦上は物凄く鳴つて居るけれど、室内は極て靜である。

士官は其一語一句力ある口調で——

僕は今日、公務を帶びて運送船備後丸に行つたが、彼の船には君も知て居る通り、海軍士官が乘て居る、其士官と用談を濟して歸るべく舷門のところまで來たのだ（大尉は歐文直譯風の口調を使ふのが癖て、而も其癖を彼は得意として居るのである。）すると一人の男が其處に立つ居て他の船員と何事か物語りつゝあつた。僕は何心なく舷門を下りかけると其男が手を擧げて僕に敬禮するトタン、僕と彼とは互に顏を見合して驚いたといふよりか寧ろ訝かつたといふが適當だらう。

如何も見たことのある男だと僕は思て、思はず足を止めた。けれども若しも此時、此船のボーイが來て今一度僕を士官の部屋に呼びもどさなかつたならば、僕は不審と思ひつゝも直に舷門を下りて其まゝ小蒸汽に乘り、歸艦て來て了つたらうと思ふ。

運命は僕等を幸ひした。僕が二足三足、舷梯を下りかけるとボーイが飛んで來て僕を呼び止め、僕は再びケビンに呼びこまれて、互に失念して居た用務を辨ずべく更に二十分ばかりを費した。

其用務が濟むと直に僕は對手の士官に向ひ、顏の四角な、眼のぎよろりとした、口髭の眞黑な、年の頃は二十八九かそれとも三十位な、背の高い、此船の事務員らしい

男は、彼は何者だと訊た。士官は手輕に

『事務長だらう、それは。』

『名前は？』と僕は問ふた。

『糸井といふのが姓だが、名は知ない、今度初て此船に乘たので……』

士官の言葉の終らぬ中に僕は『糸井！糸井！糸井！』と叫けんだ。士官は喫驚して僕の顏を見て居たが、元來、餘り好奇心に誘はれない男、寧ろ其頭の未だ黑い割合には其心が少々固定して居る男だから、僕の此叫聲について左までの注意を拂はず、シガーを口にしたまゝ、只だ眼を大きく見張つた計であつた。

僕は直ぐケビンを出て甲板にのぼるや、一人の水夫に向つて事務長の部屋に案内しろと命じた。

『事務長は彼處に居ます。』と水夫の指す方を見ると、先の男は欄干に寄つて、たゞ一人茫然と立つて居る、其樣が、其男も僕と同く、或一種の不審に打れて、それを解く

べく心を惱して居たらしかつた。

僕はツカ〳〵と近づいて、言葉靜かに

『貴方は若しか糸井國之助君とは申されませんか、間違つたら失禮ですが。』と云た。

そして對手の顏をツク〳〵と見た。對手は暫時く口ごもつて居たが、忽ち物慣れた口調と、船の事務員に通有なる慇懃の態度を以て

『私は糸井て御座いますが、さうお仰いますと若か貴方は……』皆まで言はさず、

僕は直ぐ手を出して

『野村です、野村勉二郎です。』と叫んだ。糸井の手はヂッとばかり僕の手を握つて、

僕も彼も、暫時く言葉を出し得なかつた。

僕が海軍士官の一人位になつて居る事は別に彼を驚かす程の身の成ゆきではない。けれども糸井其人が日本第一の汽船會社に事務長の役を務め居ることを發見した僕の驚愕は決して尋常ではなかつたのである。

僕と糸井の再會の歡喜が如何なる言葉に依つて互に言ひ交はされたかを詳しく言ふ必要もあるまい。二人は直に食堂に入つて杯をあげ互の健康を祝した。抑も此糸井なる男は何者であるか。まア聽て呉れたまへ、斯ういふ譯だ――

僕の未だ十五の時だ。さうだ中學校に初め入つた年の秋のことだ。小春日和の佳い天氣の日であつたが、僕の宅から五六丁もゆくと小な丘がある、それは他の山脈は全く獨立して居るので恰度瘤のやうに見える、それへ僕は一人で遊びに出かけた。

日曜だから他にも少年が遊に來て居た。此丘に登ると町が一目で見わたされるので公園にでもすれば持て來いの場所だが、小けな町には別に公園の必要もないのでたゞ少年等の遊場になつて居るばかり。

僕は木の根に腰をかけて何心なく下を見て居ると直ぐ目の下の並木道を、一人の少年が馬に乘つて面白さうに駈けて居たが、折り〳〵其姿が樹の枝に隱れて見えなくなるかと思ふと又た現はれ、少年は三四丁の處に往きつもどりつして、自在に馬を扱か

つて居るのである。僕は一心に見て居たが、次第にそれが羨やましくなつて、自分でも乘て見たくて堪らなくなつた。

直ぐ丘を下りて並木道に出て見ると、少年は恰度僕の前に馬を進めて來た。見れば僕と同年頃の少年で、身には粗末な筒袖の衣服を着て、頭の髮は蓬々と生へたまゝ櫛を入れたこともないらしい、が其顏は丸く肥つて其眼つきは如何も凛々しげに、其樣子が一見して農家の兒とは趣を異にして居るのである。

少年は僕の前を二三度駈け通つたが、忽まち馬首を轉じて桑園の中に乘り入て了つた。細い徑が一筋、桑園を通じて一軒の茅屋に達して居る。

僕は茫然と其後姿を見送つて居たが、ふと一策を思ひつき、直ぐ其後について桑園の中に入つて、やゝ暫くゆくと右傍に棒が立て居て、それに『かし馬』の三字を筆太に書いた板が釘付けにしてあるのを發見した。

『かし馬』があるといふことを聞いて居たが、さてはこの馬かと僕は其まゝツカ〳〵

と內に入ると今しもさきの少年が馬から下りて馬を柿の木に繫いで居るところ。

少年はちよつと僕を振り向いて見たが、默つて內庭に入つて了つた。見廻すと、古ぼけた母屋は、重い屋根に壓しつけられて今にも壓しつぶされさうである。軒は傾き柱は歪んで居て、藁葺屋根は名ばかり、綠の苔、白い苔一面に敷いて其所々に雜草すら生へて居る。物置のやうな馬小屋に馬が一頭繫いである。

四邊は藁、枯草、木の枝などが散亂して其間を矮鷄が二三羽餌をあさつて居た。

僕は柿の木の傍に近づいて馬を見て居ると、內庭からのそり現はれた男は、年頃五十幾歲、目の深く落窪んだ、胡麻白頭の、背の高い人物。無言で僕を見て居たが、

『貴君は馬に乘れるのか？』と一言、如何にも人を馬鹿にした口調で問ふた。

『乘つたことはないが乘つて見たいと思ふて居るのだ。』と僕も平氣で答へてやつた。

『そんなら乘つて見るが可い』と言ひつゝ、彼、其人は僕が此家の主人と鑑定した、氣難しさうな老人は直に馬首を捉へて控へて居る、

凹むことの何よりも嫌な、生意氣なる少年なる僕は、內心やゝひるんだけれど、先の少年に勵まされて居たから勇氣を皷して、馬の傍に寄り、鞍に手をかけた。そして足を鐙に掛けたまでは可いが、なか〳〵身體が輕く馬の背に上らない。中學校の運動塲で木馬を飛び越えることに自慢して居た僕も、生た馬の背に乘る一段に及んで頗る當惑して居ると、傍で苦笑をして居た意地の惡いお爺さん、遂に見かねたか、其荒々しい腕を伸して僕の身體をちよいと掬つた。と思ふと僕の身體は早くも馬の上に在るを發見した。

さて馬の背に乘つて見ると、生れてから初て馬なる動物に乘た僕は、馬の丈の今更に高く、馬の背の今更に幅廣く、しかして我身體が一種異樣なる彈力に支られて居るを感じて驚いた。

何所までも人の惡いお爺さんは手綱を柿の木から解いて馬の頭を並木道の方に向け『そら！』と言ひさま、その手綱を鞍へ投げかけた。人の善ささうな馬はのそりの

そりと、さも面倒臭さうに其四足を動かしはじめた。この時、此馬が若し、馬の主人のやうな意地惡るならば、必定思つたに違ない『生意氣な小僧だ。一ツおどかして、泣面かゝしてやらう。』と後足で急に突立つ位な藝を演じたかも知れない。

けれども元來少年に向つて甚だ親切なる馬は、彼の老人よりも僕を愛し、たゞ斯う思つた『やれ〳〵厄介な物を背負れたことだ。仕方がない其所らを一周歩いて來てやらう。』

桑園を出て並木道にかゝると、今まで靜かに並足で歩いて居た馬は、早足になつて其蹄を鳴らし初めた。僕の身體はヒョイ〳〵と上に飛び上がり、恰度、鞍の上で躍つて居るかのやうてある。僕は思つた『他人が馬に乘て居るのを見ても又た騎馬の畫を見ても、皆な馬と人とは恰も一體のやうになつて其運動が如何にも自由自在らしく見え、甚しきは馬の上で何十貫目の鐵棒を振り廻すなどいふ豪傑も居る。それだのに自分の身體は何故斯う馬の背に着かないで今にも轉げ落ちさうになるのだらう。』と。

けれども僕は勇氣を奮つて手綱を採つたまゝ馬の走るに任して置いた。馬は船と異つて彼自身に感覺があるのだから如何放擲て置いても物に衝突する心配はない。其點は頗る安心なものだ。

並木道が盡ると國道に出る、これを左に廻ると丘を一周して歸ることが出來る、然し其道程は十七八丁以上もある。馬は頭を左に轉じて此一周をやらうとした。蓋し彼は數々かく敎へられて居たに違ひない。

此時僕は如何しやうかと思つたといふは、十七八丁の道程が恐いのではなく、國道は並木道と異つてやゝ人通が多い、車が通る、荷馬車が通る、其間を首尾よく乘りぬくことは僕に取つて頗る覺束い役だと思つたからである。けれども馬は遠慮なく其目的通りに歩みだした。馬に乘られて居る僕は如何することも出來ない。

はや國道を三四十間も行くと、後から蹄を鳴らして來た騎馬がある。忽ち僕の傍へ來たのを見ると先の少年が裸馬に乘て來たのである。

『何所へゆくのです。』と彼は莞爾笑つて問ふた。

『何所へゆくのだか知らない。』と僕は答へざるを得なかつた。

『これから馬を洗ひにゆくのだから貴方も私に從いておいでなさい。』と少年は笑つて國道を右に折れて田甫路に馬を進めた。さうすると僕の乘て居る馬は恰も若主人の言ふことを解して居るかのやうに、先に立つてゆく馬の後を追ふてやはり田甫道に下りた。

『路が狹いので馬を駢べることが出來ない。少年は後を振り向き〳〵、靜に馬を進ませて居る。

『何所へ馬を洗ひにゆくの?』と僕は問ふた。

『蛇の池です。』

『蛇の池?』と僕は驚いた。この池は山の麓にあつて、周圍は老樹鬱として繁り、蒼々と水を湛えて居るので如何にも物凄さうに見え、少年等も氣味を惡がつてめつたに近づかない所である。

『何時でも蛇の池で馬を洗ふのだらうか』

『さうです!』と少年は平氣で言ひ放つた田甫路を十丁もゆくと家數四五十軒もある小村に達する。其村を横ぎると路が爪先上りになつて竹籔の彼方を流れる溪流の音が聞えだした。

間もなく池の潯に出ると、少年はひらり馬から下りたので僕は鞍を捉へてずる〳〵と下りた、といふよりか滑り落ちたといふ方が適當だらう。

池の一邊が遠淺になつて居て其處の汀はやゝ池に突出して居るので成程馬を洗ふとは恰度可い場所だと僕も思つた。

池を挾んで居る兩方の山は嶮峻にして見上ぐるまでに高く、西岸は山の影で暗いけれど東岸は西に傾むいた秋の日を受けて明るく輝やいて居る。風のない日であるから一碧鏡のやうな湖面は山の影森の影を倒に映し、湖心最も寂なる邊には白雲の影をさへ沈めて居る。

少年は裸馬を牽て膝のあたりまで水の屆く所に出て、馬を洗ひ初めた。僕は岸からこれを眺めて居る僕の乘て來た馬は楊に繫がれたまゝ草を食つて居る。

馬は少年を中心にして波紋が脈々と起りそれに日の光が映つて如何にも奇麗であつた。

『此馬も洗ふのか。』と僕は大聲で問ふた其聲を山彥が答へて湖面に響きわたつた少年は頭を擧げて僕を見て、優い笑味を滿面に漲ぎらして、首を左右に振つた。僕は其後、何時までも此時のことを忘れない。今でも眼の先に直ぐ此時の光景を浮べることが出來る。僕の眼の底には此等の光景が畫を見るよりも鮮かにのこつて居るのである。

暫時くして我少年は馬を洗ひ了り、岸にのぼつて來た。

『何故此方の馬は洗はないのだ？』

『鞍を置いて來たから』と少年は答へ、『歸りは二人が此馬に乘つて裸馬の方は牽て歸るのだ。』と言ひつゝ彼は少時休息すべく草の上に足を投出した。僕も其傍に坐り

『僕でも乘れるやうになれるだらうか。』

『なれますとも。直ぐ乘れるやうになる。』

『君は幾年だ？。』

『十五。』

『十五なら僕も同じだ。これから毎日乘りにゆくから敎へて吳たまへ』といふや少年は少し顏を赤らめて

『私は出來ないから父上に敎へてお貰ひなさい。父上は上手だから。』

『父上は馬の先生かえ。』

『先生だ。昔は殿樣に馬を敎へたのださうだ。』と少年は答へて得意の色を示すべく禁じ得なかつた。

これを聞いて僕も少年ながらに、やゝ彼の身の上が讀めて來て、急に尊敬の意が加はり、初から氣に入た此少年が今更親しくなつて何時しか仲の好い以前からの朋友の

やうな氣になつて了つた。

『これから毎日遊びにゆくよ』

『あゝ來たまへ、學校へも何處へも行かないのだから毎日宅に居るから。』と彼も既に僕を朋友達扱いにして親しく話すのである。

『何故學校に行かないの？』と僕は無遠慮に問ふた

『父上がやつて呉れないのだ』と少年は眞面目に言つて『もう歸りましよう！』と立つた。

僕を前に、鞍の上に乗せて少年は後に乗り、裸馬の手綱を採つて、これを牽き、池の邊を出立つて歸路に就いた。少年は後から巧に馬を御し、馬は心地よく走つて田圃路を過ぎ、國道に出て、國道から並木道に入ると、短い秋の日は既に暮近く、空氣は水の如く澄み、並木の小枝を蒼空に透して仰げば、星影の一ッ二ッも枯葉の間から覗かれさうな頃となつた。少年は口笛を吹く、二頭の馬は蹄の音を揃へて走る、僕は何とも知れず、たゞ嬉しくて堪らなかつた。

此日から僕は殆ど毎日のやうに此少年の許に出かけて、二人して馬の頭を並べ、並木道を走らし、丘を一周し、時には蛇の池に馬を洗ひにゆくなどこれまでにない面白を日を送り得ることゝなつたのである。

聞き得たる處に依ると少年の父は糸井專造といひ以前は藩の馬術の指南役で知行百五十石を領し、隨分立派に暮して居たのだが、維新後の零落甚だしく遂に今の有樣となり果たといふ事だ。專造の零落は時勢の罪ばかりでなく、其大部分は彼自身の性癖に由れることは、僕も彼に近づくにつれて人の噂を確めたのである。

彼は馬術の外、何の技倆もない殆ど無學文盲な人物であるばかりか、頗る片意地で頑固で、少も世の成行を見て身の計を立るといふことを爲ないそればかりなら未だ可いが、それが昻じて世の成行を咀ひ且つ力て逆行しようとのみ爲て居たのである。

貧苦の中の『かし馬』は生業の爲ばかりでなく、一は專造其人の性癖も滿足せしめる

為であつたといふ證據は、中學校の生徒、巡査、市の若い者などが馬を借りに、彼の許にゆくと、彼は自分の弟子でも來たかのようにこれを扱らひ、馬の乘樣が如何だとか、斯うだとか、小言の千百を並べた末が頭ごなしに怒鳴りつけることも度々あるので、氣の弱いものか、氣の短いものは一度で懲て行かなくなる、それを彼は却て得意らしく、今の奴等にはとても馬は乘れないと力味のを見ても解る。

専造はそれでも可いが氣の毒なのは子息の國之助である。父は彼を尋常小學校までやつて退校して了い、乘馬術だけ十分に仕こめば祖先に對して申譯は立つと、自分の無學を悔ひずして却て愛見までを無學に終らしめようとして居るのである。

僕は國之助を知つてから、其事情を知るにつれて少年心にも同情に堪えず、色々の本を貸して讀ますようにして居たが、彼は渴けるもの丶水を求めるが如く、一書を讀み了はれば又一書と、僕の借し得る丈けの本は三四ヶ月の間に大概讀んでしまつた。

彼が最も愛讀したのは、ロビンソン漂流記の和譯と、ジユールベルスの海底旅行の和

譯、在來の本では源平盛衰記三國誌等であつた。

僕は彼に知識の泉を借したばかりでなく、實に少年に取つて更に大なるもの、即ち空想の翼を貸した。

彼と二人で馬首を並べ田甫路を歩みながらの物語は一として將來の空想でないことはなくなつた。彼は或時

『馬乘になるよりか船乘りになるはうが如何に愉快か知れない。馬に乘て五大洲を横行することは出來ないが船に乘れば地球を一周することが出來る』と言つて『僕は如何しても船乘になるのだ。』と力味だ。

翌年の正月の末と記臆する、夜の八時頃僕は學友の宅に遊びに行つて其歸りがけ、例の並木道を一人で通りかゝると、糸井國之助にひよつくり出遇つた。彼は何時もの快活なるに反し、屈托した顔つきをして居るから如何したのだと聽くと、

『今父上と喧嘩したのだ』といふ。

『如何して！』僕は驚いて訊た。

『僕は斷然と僕の目的を話して父の賛成を求めたのだ、今から五六年東京へやつて呉れろと賴んで見た。處が父は非常に怒つて、船乘になつて何になるのだ、貴樣は武士の子だ、武士の子が船頭になるなんて見下果た了見だと怒鳴つけた、僕の父の言ひ草が餘り亂暴だから二言三言爭ふと、如何したことか父は泣きだして、子息にまで馬鹿にせられるやうになつたとは情ない、貴樣のやうな奴は最早力にしようとは思はないから、出てゆくなら何處へでも勝手に出てゆけ、そのかはり生涯歸つて來て呉れるなと言ひだしたのだ。母も傍で泣くし、僕もとう〳〵泣て父に謝罪つたが、考へて見ると僕ほど不幸なものはないよ……』と言ひさして國之助は愁然と頭を垂れた。

『そして君は今何所へゆくのだ。』

『何處へゆく積りもない、たゞ餘り屈托したから外へ飛び出したのだ。』

『そんならこれから僕の宅に來たまへ』と彼を誘ふて歸へり言葉を盡して慰めてやつた。

實に彼は不幸な少年であつた。彼の兄は幼にして此世を去り、彼の力とする人は父ばかり、其父は世間並はづれた頑固者、而も彼の胸底には燃ゆるばかりの志が潜んで居る。彼はそれを壓へて父の許に、朝夕たゞ馬の背に乘つて居なけばならないとは！彼の心を知るものは僕一人であるから彼は僕に親しみ、僕を力とし、三日も僕が彼を訪はなければ必ず彼は僕を訪ねて來た。

けれども運命は何時までも僕等二人を狹い町に置いて互に往來することを許さなくなつた。十六の春の末、僕は叔父に招かれて東京に留學することゝなり愈々出立といふ四五日前に僕は此事を國之助に話した。

國之助の驚愕は實に意想外であつた。初は信じなかつたが、遂に事實なることを知るや彼は顏色を變へて黙つて了つた。

出立の前日、僕の父は愛兒の門出を祝すべく學友などを招いて心ばかりの饗宴を開

いたが、其時僕は國之助をも招いたけれど彼は來なかつた。

其夜、彼から一通の手紙が來て、其文言の意味は『君若し東京に去らば僕は最早、友も何もなくなつて了う。明日から誰と馬を駢べて乘らう、誰と此志を語らう、誰が僕の志を憐れんで慰めて吳れる、誰れが僕を勵まして吳れる、然し今更これを言ふのは愚痴だ、僕は僕に志を立さして吳れた君の恩を忘れない、そして此志は必ず貫いて見せる。君も亦た何時までも僕を忘れて吳れるなといふだけであるが、僕はこれを讀んで一人泣いたのである。

翌日は朝早く父と共に宅を立つた。母や、弟や、學友や、親戚の者は峠の中の茶屋まで見送つて吳れた。僕の故郷から其頃港まで出るには五里の道を人車で走なければならない。父は港まで僕を送るべくやはり車に乘つて峠を越されたのである。僕は立つ前に國之助に會ひたく思つたけれど、多分見送つて吳れるだらうと思つた彼の姿が中の茶屋で見なかつたので、頗る失望したのである。不思議に感じつゝ峠の絶頂の茶

屋まで來ると、馬に乘つて坂を見下して居る一人の少年が彼であつた。彼は莞爾〳〵笑つて馬を近づけ

『早かたねえ』とたゞ一言。

人車の進むにつれて馬も進む、彼は馬を人車に並べて走らす。馬上の人、車上の人、語らんとして語ることが出來ない。

『最早可いから歸つて吳れたまへ。』

『何に、もすこし』と彼は低く答へて靜に駈ける。坂を下つて更に半里、馬と車は相並で走つた。

『眞實に最早可いよ。』

『もすこし』

『如何かして君も上京するやうにしたまへ』

『さうなると僕も嬉しいけれど……』

そのまゝ二人は無言。野は菜種の花が咲き亂れて居る。大空は霞み、雲雀は高く啼いて居る。所處を眺めても佳い景色である。

小川に渡した石橋まで來ると、彼は突然馬をとゞめて、『左樣なら！此處で別れる！』と言ひ放つた其眼元には涙が一ぱい含まれて居た。

車が二三丁行き過ぎた時、僕は後を振り向いて見ると、我少年は馬を石橋に立て此方を見送つて居た。僕は車の上で熱涙を呑んだ。

東京に着くや僕は、直ぐ手紙を出し、彼からも書狀が來たが、それも一度ぎりで、其後は僕から三四度音信したけれど遂に彼の返事はなかつたので僕も何時かそのまゝ捨置ことゝなつた。

僕は十七才まで東京に居て、それから江田島の海軍兵學校に入り、江田島を出るや軍艦に乘り込み其まゝ終に一度も故郷に歸らなかつたから糸井國之助の其後の樣子は全く今日が日まで知らなかつたのである。僕の父母は僕の江田島に居る時分既に東京

に住居を移して居たのだ。

ところが彼も亦た僕の江田島に居る時分、故郷を飛び出して長崎に出たとの事である。

長崎に出た後、如何して船員となり、事務長にまでなつたのか、彼は十分話さないから解らないが何しろ彼の事だから非常に勉强したに違はない。如何だ！珍談だろう！今日僕が十年ぶりに此少年と備後丸で、大連灣で、再び出會はし、そして二人の馬乘が、二人とも船乘になつて居たといふことは！

我が海軍士官の物語はこゝで終つた、自分は何心なく『何故、糸井は君の手紙に返事を出さなくなつたのだろう。』『あゝ、僕も其事を聞いた。すると彼は平氣で郵便箋すら其頃はなかつたと答へた。』

自分は士官と共に杯をあげて糸井國之助の健康を祝した。

惡魔

《一》

『如何な奴？』

『まア、奴なンて。口が惡いのねえ』

『そんなら如何な——先生？。』

『私、知ないワ、如何なンて。』

『だつて見たのだらう。』

『先刻御挨拶を仕たの。』

『だから如何な人だか訊くのサ。』

對手の君子は急に眞面目な顏をして自分を凝視め、微に吐息をして『大變學者だッてねえ。』

『誰がそう言ッた。自分で言ッたのだらう。』『御自分が何てそんなこと被仰るもんですか。宅の母上がさう言つててよ。』『どうせ斯な山の中に住みたいといふンだから變物の青瓢簞だらう。』

『武樣變物じやないワねえ』と君子は言ひ捨てゝ駈け出したが、五六歩で立どまり、莞爾笑つて『日が暮れたら遊びにお出でなッ。必然！。』

『知らないッ！。』と自分は其まゝ裏山に登つて小松原を歩いて居たが、何となく胸がむしやくしやする。君子は十八、自分は二十從兄妹同士で仲善で、自分は誰よりも君子が好き、君子も自分が好であつたらしいのが、今度、淺海の一家突然、君子の宅の母家を借りて住むことゝなり、其總領息子の謙輔、東京に久しく留學して居た青年が歸つて來るといふので一週間も前から叔母を初め君子姉妹までが噂をして待つて居て、それで今日の朝、愈々謙輔が着いたとのこと、君子に遇て見ると嬉れしさうに、そはくして居る癖に觸らざるを得ない。

元來山内家と自分の布浦家とは古くからの親戚て、某町からは十二三町もある此山の中に小さな丘一ッ隔て代々住んで居るので、君子の母は自分の叔母に當り、叔母は五年前に其良人を失ひ今では君子と豊子と繁といふ末の男兒と四人暮し、母屋は廣過るとて閉めて了ひ、門の傍なる離室三間を常の住居となし、又自分も早く父を失ひ母と二人淋びしく暮し、下男下女の外は、先づ自分を男の中の大將として兩家極て親密なる交際をして來て居たのである

一月程前に町から人が來て、今度出來た登記所の所長として來られた淺海氏の爲に山内の母家を借りたいと思ふが、相談して見て呉れまいかとのこと、この中間に立つた人は年來の交際ゆゑ、自分の母も早速承知して山内の叔母に此意を傳へて尚ほ色々相談した結果が、登記所の所長樣と言へば田舍では一個の立派な紳士、それが借りたいとあれば無下に否むもお可笑なもの、又此淋い山の中に一家でも殖えれば、女ばかりの世界が大に心強くなるといふ利益もあり、兎も角も貸した方が可からうといふこ

とに定つて、其旨を先方に答へたのである。

淺海氏は喜んで町の假住居から移轉ッて來たが、家族は三人である。主人の所長殿は年齡頃五十二三、背の高い色の淺黑い、頭髪半ば白き立派な人物、妻は四十六七で叔母よりか少しの年長者、夫婦ともに見たところ氣だての優い、快活な、交際に慣れた人々らしく、十二歳の女の子を一人連れたので我々の一族は又もや二人の女子を得て、何所までも女人國の體を失はないけれど、猶且つ五十以上の堂々たる一男子を得たことは叔母達の大に意を强ふしたところであつた。

寂莫たる山林の生活が此後から少なからず賑ふて來て、見聞の狹い叔母達から見ると、役人生活に慣れて所々を渡り歩いて來た淺海一家の人の物語や生活法は少からず興味を惹き、好奇心を滿足せしめ、又た尊重の念をさへ起さしめたのである、

そして二週間も經つと、婦人連に取りては更に一の興味ある問題が出來たといふのは、謙輔か遠からず歸宅するとの事實が知れたのである。

謙輔年齢は二十三、其注文には一二年田舍に居て靜に讀書したい、就て住宅は町を避け出來るだけ閑靜な所にして貰ひたいとのこと、淺海氏が登記所に通ふ路の遠く且つ難儀なるをも辭せないで、山内の母屋を喜こんだのは此理由であつたのである。

謙輔が着く三日前の晩、自分が叔母の宅へ遊びにゆくと、叔母は自分と君子に向ひ、

『淺海の奧樣が今日謙輔樣の寫眞を見せたが威のある立派な方だよ。宅でも君が男であつて呉れると私も大變力になるけれど、繁じやアまだ〱先が長うて、あんな立派な息子になるのはちよつくらのことじやない。私は今日寫眞を見て眞實に羨やましかつた。』

『そう、そんなに立派な方？』と君子は頭をかしげて、裁縫の手を止めて問ふた。

『あア』と輕く應じて叔母は『お前もこれからすこし氣をつけないと可けないよ。田舍娘で行儀も作法も知らないと思はれないやうに仕なければ。』

『そうですねえ』と君子は至極感心したらしい。

『だつて田舍娘が急に東京者になれもすまいぢやあないか』と自分がつい口を入れると、叔母は『けれども田舍娘には田舍娘で相當の敎育をして來たのだから笑れるやうなことを仕ては君ばかりじやアない、私まで卑下れるからねえ。』

『眞實にそうだわ。』と君子は頗る眞面目である。

『何に關はん僕は暴れて見せてやるのだ。』『眞實に武樣は變物だよ。』と君子は今更らしく眼を見張つた。

『そうよ、變物のところを見せてやるのだ。』『馬鹿をいふもんじやアないよ、お前なぞも謙輔樣が來られたら色々敎へて貰う方が可い』と叔母は大眞面目。

『何をサ。』『何かにつけてサ。』『僕は鮒釣と狸狩を敎へてやらア。』

叔母も君子も機嫌が可くないので自分は直ぐ外に飛び出したが、此時から既に自分は淺海謙輔が我等の仲間に加はることを何となく歡迎しては居なかつたのである。

それて今、君子に別れて小松原を歩いて居ても、何時ものやうに面白うないばかり

か、口惜いやうな、情けないやうな氣がして堪なかつた。

（二）

成程自分は變物に違ひない。自分は小供の時分から他の腕白仲間と一緒に遊ぶことは餘り好なかつた。なるべく單獨で惡戯が爲たかつた。たゞ其中に君子にだけは心置きなく遊ぶことが出來、君子は自分の從妹であるばかりか、時には姉のやうな心持もして、長ずるに從ひ、益々君子と親み、其姿を二三日見ないと、如何も物足ず感じて淋しさを覺えたものである。

それで君子は自分のことを變物だと常も稱て居たが、自分は君子にさう言はれることは別に不快な感も起らなかつたのである。

ところが、淺海謙輔のことゝて、今度、君子から變物と言はれたことだけは、今更のやうに聞えて、自分は少からず不快の念を醸したのである。

『變物なら如何したい！』自分は反抗して見たくなつた。

『どうせ僕は變物だよ。猶ほ變物になつて見せるぞ。』と一念の發作を禁じ得なかつた。

既に斯ういふ風だから自分は、淺海謙輔に近づく氣は毛頭もないばかりか、なるべく其機會を避けるやうにして居たのである。

であるから君子が遊びに來いと言つたけれど、必定謙輔も同席だらうと、行かないで其夕は宅にじッゝ込んで居たが、我儘者の癖にして、斯うなると益々氣色が惡くなるばかり、遂には何故君子が呼びに寄さないだらう、とまで思ひ、獨りで焦心て居た。

夜の九時頃まで讀みもせぬ本を机の上に、洋燈の心を出して見たり引込めて見たりして居たが、ふと頭を上げて見ると窓の障子に月影が射して居るので、其まゝ外に飛び出した。

夏の末、秋の初の夜の冴え渡り、半圓の月淸く澄みて下界はしつとりと露けく靜かに、山も林も黑い影に淡霧の白き光を浴びて浮んで居る。

丘の背を辿つて山内の裏山まで來て、小供の時から君子等と莚を布いて遊んだ平地

へ出ると此處からは北向の村を見渡すことが出來る。村は何處、林は何處、たゞ見る、月の光は、あらゆる直線を和げ、あらゆる色彩を融き、我世をさながら夢の世に變て居るのである。自分は岩陰に佇立んで居た

暫くすると何者か自分と同く上つて來た人の氣勢、靜に控へ、呼吸を凝らして居ると、其者は自分の傍らの岩に腰をかけた。隔つこと十歩、されど岩陰は自分を隠くして居る。

彼も動かず、我も動かず、斯くて幾分を過ぎた。此時、寂として音なく、たゞ何處にか蟲の音の微かに、遠く聞えるばかり。

忽ち物言ふ聲！、自分は悚然として閉息した。言葉は嚴かに、音に澄て『天に在ます神、慈愛の神様……萬有を統給ふ神よ、塵深き都を去つて此靜なる山の上に立ち、心置きなく祈禱を捧げ得ることを感謝します。信仰薄く、常に地の煩悶に苦しむ我を憐れみ給へ。この清き村、この靜なる山、此美はしく自然の懐に導き給ひしを感謝します……。』

聲は慄へ、嗚咽泣ぐ音を交へて『されど神様、されど、されど……斯く祈りつゝ我心は何故に眞實に覺醒むる能はざる乎、神様、此天地を統給ふ神様、限りなき時と限りなき空間、思へば不思議にして驚く可き此世界に斯生を寄せながらも、我心は何故に常に平然として月に泣き花に笑ふの情と親を慕ひ戀を樂むの心とにのみ其安和を得て滿足するか。神よ、神よ、不思議と知りつゝも不思議を感ずる能はざる人の心は初より神の定め給ひし約束なるか。……然ば何故に神は、我心に此遂げ難き希望を置き玉ひしか……何故に我心を更に暗く且つ鈍く作り玉はざりしか……獸も等しく生存を希ふ欲望を與へながら、而も且つ天を仰いで其限りなきを見、此の生命の泡沫の如きを思ひ得るの心を、人には授け給ひしぞ……嗚呼神よ、我苦悶の聲を憐れみ給へ……。』

聲は止み、泣ぐ音のみ微かに聞えて、やゝ少時。少時は泣く音も絶えて幾分かを過

ぎたが、やがて彼は其處を去つて元と來し途へ引返へし、其足音も聞えなくなつた。

何者ぞ？、言ふまでもなく淺海謙輔！、自分は直ぐ山を下りて叔母の離室を訪ふた。

君子は『何故早く來ないの？』『たゞ來なかつたのサ。』と言へど自分は山に得し不安と不審の胸猶ほ靜らず『今山に上つて月を見て來た。』『そう？、先刻まで謙輔樣が來て居て東京の話をして聞したのに。』『如何な先生だい？』

『優さうな人よ、』と君子は母を顧て『ねえ母上。』『さうさ、そして何處か人ずれの仕ない內氣な所があつて眞實に私は氣に入ちやッた』と叔母。

『明日武樣ところへも挨拶に行くと被仰つてゝよ』と君子は『そして武樣の事を話たの。』『何と言つて？』

『年齡は十九だが腕白者だから何分願ひますと私が賴むで置た』と叔母。

『そして變物だつて私が言つてやつた。』と君子は笑つて自分の顏を覗込んだ。

けれども自分は山に得た不審の心安らず、君子に反抗の氣も乘り兼て可笑くもない、

腹も立ぬ。默言つて居ると、君子は言譯らしく『けれども私武樣を譽めて置いてよ。』

『何と言つて？、』『變物だけれど感心に書物が好で英語が上手だつて。可いでしよう其なら。』『馬鹿言つてらア』と自分は苦笑したばかり。

『何處で英語を習つたのだッて訊いてよ。木實樣といふ人に敎つたのだと言つたら木實といふ人は何だと聞くから耶蘇だつて言つたの。』『そしたら何と言つて？、』『今其人は何處に居るかと聞くから、先達まで町に居て敎會堂の牧師でしたが今は何處へか轉任して居ませんと言つたの。そしたらね武樣耶蘇信者かッて訊いてよ。』『信者だッて言つたの？、』『否え、初は耶蘇らしかつたけれど今は何でもないッて。』『そしたら何と言つて？、』『たゞ默つて居てよ。そしてね私に耶蘇の說敎を聞たことがあるかと訊くから、武樣が曩日山て木實樣の聲色だつて說敎の眞似事をしたのを聞ましただけだと言つたの。笑つて居らしつてよ。』『餘計なことを言つてらア。』と自分は言つて歸らうとすると叔母は早口に『耶蘇かも知れないよ謙輔樣も。』『そうかも知れない。』と

自分は起つた。君子も起つて『耶蘇だつて可いワ。』『大嫌ひだッて言ッてた癖に。』『それは以前のことだワ。』

《三》

實に自分は木實先生に英語を學び又た耶蘇教の說教をも聞かされた。けれども自分は英語だけ學んで宗旨の方は如何しても氣乘がしなかつたのである。

英語のバイブルは讀み習ふたが、バイブルの教は自分は如何しても受取れなかつたのである。又自分は其教を求める氣も全然無かつたから、木實先生は自分を愛して呉れる一方で、甚だ失望して居たらしかつた。轉任して町を立つ前の晩、久く無沙汰して居た自分を使者を以てわざ〳〵招び寄せ、自分をたゞ一人會堂の隅に坐らして『天に在ます父よ、何卒か此青年を救ひ玉ふて無窮き生命の泉を汲まし給へ……』云々と熱心に祈られた其時、自分はたゞ眞面目に先生の親切を感じたばかりて、宗旨の上には少も心を動かさなかつたのである。

けれども計らず淺海謙輔の祈禱を竊聽きした時は言ふべからざる者を感じて自分が淺海に對する反抗の念をすら幾分、曖昧にして了つた。

翌日の朝、謙輔は自分の宅を訪ふて來た。母も自分も出て挨拶した。見ると背のすらりとした色の白い、思つたよりは若々しい青年で。自分達に物言ふ聲音には一種の愛嬌ありて敵をも和げさうな力あり、其眼は輝きて鋭く、急速く左右を顧眄するところ、彼が不穏の心を示して居た。

其の誘ふに任して相伴ふて野に出た。露は旭にきらめき、遙けき野末の村よりは烟が上つて居る、この村は海濱に沿ふて鹽田あり、烟は鹽竈より立上るのである。

『貴樣は朝晩散歩を爲いますか』と彼は自分を顧て問ふた。

『散歩と言つて規則立つたことは爲ませんが、野山を馳け廻ることは何より好きですから始終行つて居ます。』『お一人で?』『さうです、僕には友達が別にありませんから。』『これから僕と一緒に歩きましよう。』

『何卒願ひます。』『此邊には佳い風景の所が澤山に有るでせう。』『別に佳いといふ所も有りません、大概こんなものです、海濱に出れば幾分か變つて居ますが……。』

それより二人は丘に上り村を過りなどして、一時間ばかりも歩いた、其間、自分は見慣れて珍らしとも思はぬ村落樹林の景も謙輔には餘程氣に入つたらしかつた。

『貴樣には面白くもないでせう、こんな景色は？』と問ふたから自分は有體に『何でもありません。』『さうでせう。珍らしいから美くしいと思ふのは景色ばかりでなく、何事もさうでせう。私も其中には貴樣のやうに此景色が何でもないやうになる時が必然來るのです。』と彼は理由ありげに言ふので、自分は『當然のことで別に不思議はないでせう。』『さうです。當然のことです、けれども私は其當然が甚だ氣に喰はないのです。』『何故です。當然のことは當然のことでせう。』『さうです。人の心が左樣作られ居るといへばそれまでです……併し……。』

謙輔は默つて了つた。自分はそッと彼の顔を覗くと、彼の眼は凄く光り、彼の唇は

堅く閉ぢて居る、端なく自分は彼の前夜の祈禱の言葉を想ひ起した。

『貴樣は耶蘇敎をお聽になつたことが有るさうですね。』と突然問はれて『有ります……けれど今は……』『今はお止になりましたか。』『初から信者ではありません、たゞ聽たばかりです。』『では貴樣は神樣は無いものと思ふのですか。』『あるか無いか、そんなことは思つたことも無いのです。有るものでせうか。』自分の語氣にはやゝ冷嘲を帶て居た。

謙輔は靜に『有るかも知れません、無いかも知れません。』『だつて貴樣は神に祈つたではないか』と言ひたかつた、けれど流石に口には出し得ず、たゞ彼の顔を打まもつた。

『牧師は何と貴樣に敎へました？。』と問ひかけたので『有ると敎えました。』『たゞ有ると？。』『さうです、有ると敎へて其理由を色々話して聽しました。けれども私は……』言ひかけると彼は直に、

『其理由が解ないといふのでせう。』『さうです。私には理由が解らないのです。けれども研究も仕ませんでした。』『研究！研究！私も研究は大嫌いです。神の有無を研究するのは……幽靈の有無を研究するのも同じことです。』と言つて謙輔は冷かに笑つた。

『幽靈も神樣も同じやうなものですかナ。』『兄弟分でしよう！……あゝ佳い風景だ！』と彼は突然足を止めたので氣がつくと、近郊遠村を見渡し得る丘の背に我々は立つて居たのである。

『そら、彼所に見えるのが此所の敎會堂です』と自分は町端に立て居るペンキ塗の家を指した。謙輔はたゞ首肯いたばかり。村の小女が二人、松葉掻の籠を背負て傍の徑を過ゆく、其一人が自分に會釋したのを自分は呼び止めて『オイお鶴、お鶴！先生に今晩出かけると言つて呉れ。』『先生とは誰です』と謙輔は訊た。自分は笑つて『お鶴の兄です。叔母の家の小作を仕て居ますが、淨瑠璃の名人で、面白い男です、變物

扱に村の者は仕て居ますが私は好だから時々遊びに行つてやるのです。』『貴樣も淨瑠璃を行るのですか。』『彼奴が勝手に先生になつて無理に私を弟子に仕て居ますから少づゝ行つて居ます。讃美歌よりか淨瑠璃の方が面白いようですなア。』

謙輔は思はず聲を放つて笑ひ『そうかも知れません、先生も耶蘇敎の先生よりか可いかも知れない！』『然し木實先生は全く好い人でした、この前の會堂の先生は。』『好人物必ずしも眞實の傳道者てはないようです。』

二人は暫時く默したまゝで立て居ると、松原の彼方で先の少女の唄ふ聲が聞える。謙輔は『一度私も淨瑠璃の先生の所へ連れて行きませんか。』『何時でも御一緒に參りませう。』

以上の如くして自分は淺海謙輔と相知つたのである。

《四》

謙輔の言葉の節々、自分は頗る不審に思つたのである。彼は果て耶蘇敎信者てあら

うか。自分に取つては彼が耶蘇であらうと無からうと、何であらうと別に關係もないことで、氣に留めるほどのことで無い筈が、實際はさうでなく、今までは、教會に出入してすら何にも感じなかつた自分が、不思議にも痛く彼の擧動に動かされたのである。

淺海謙輔は果して耶蘇教徒であらうか。神に祈りたる、其熱心な言葉を思ふと正しく信者らしく、而も彼は『神は有るかも知れず、無いかも知れない』などいふ曖昧なことを言つて居る。のみならず、讃美歌より淨瑠璃の方が面白いと自分の言つた言葉は奇怪とは思はず、却つて大笑したではないか。

彼も亦た一個の變物であるまいか。

自分には謙輔の人物が不審であつたのである。

《五》

謙輔に初めて會た日から三日目、郷里から三十里隔たつて居る某町に住て居る叔父の宅から自分を招く手紙が來た。本年は珍らしい大競馬があるから是非に來いと祭の案内狀。自分は餘り進まなかつたが、母が强るので終に出立した。

三四日滯留の積が一週間になり十日になり、更に叔父一家の者と讃岐琴平詣を爲なければならぬことゝなり、忽ち一月足ず過ぎて漸く宅に歸ることが出來た。

宅に着たのは夜の七時頃である。母と差向ひ夕飯を濟すや土産物を持て叔母の家を訪ふべく外に出ると、夕月の影冴えて、恰度、淺海謙輔が初て此處へ來た頃の夜の樣と同である。月は一月進み、秋は中となり、露重く蟲の音繁く、引く呼吸のやゝ冷きを覺ゆるまでになつただけである。

叔母と外の子供達は居たが君子の姿が見えない。

『お君さんは?』と問ふた自分の語氣には我知らざる不安と不足の音を帶びて居たのである。

『謙様の宅よ、姉さんは』と豊子が何氣なく答へた。

『呼でおいでよ』と叔母が言ふかと思つたら默つて居る。自分は旅行中の事どもを話して居たが何となく心が落着ない。それとも叔母は氣の着く道理もなし、色々と訊いて居たが自分の答辯に氣の乘ないのを見て『疲れて居るだらうから早く歸つてお寐み、謙様もお前の歸を待て居なさつたから明日は朝から遊びに來るが可い』と言つたが君子のことは何とも言はない。

外に出たが直ぐ宅に歸る氣にならず。仰いで大空を望めば星の一個、今更の如く眼に映る。自分は今更といふ、何故なれば、これまで幾百千度、空を仰いで星影を見たが、此時ほど我心に其清くして澄たる、意味ありげなる趣を印したことはないからである。今までに感じたことのない、うら悲しい懷がして、涙さへ誘ふばかりになつた。

今から思ふと、自分は其頃、君子を戀ひして居たことが解るのである。何故自分は謙輔を叔母や君子等の如くに歡迎することが出來なかつたか、何故自分は、君子が謙

輔に近いたことを知ると共に、我知らず深い哀みを感じたか。此悲哀は戀の果敢さの悲哀ではないか。

けれども自分は當時、明かに自分の戀を認ためては居なかつたのである。たゞ夫れ、物足らぬ思ひ、言ひ知らぬ哀を催ほしたばかりに過ぎない。

家には歸らないで自分の足は知らず〳〵裏山の松原に向た。徑は幾重にも迂回して緩かに、樹間より洩る月影を蹈て頂に到り、先の夜、謙輔が神に熱禱した岩陰まで出て、暫く停立んで居ると、人の話聲が近いて來る。

自分の今來た路を登つて來る人は山内の者か自分の宅の人ならでは無し、何者かと氣をつけて待つて居ると、一人は謙輔の聲、一人は君子の聲！

自分は直ぐ身を木陰に隱して了つた。彼等の様子を覗がふこと、其物語を竊聽きすること、これ善きことと惡しきことなど思ひあきらむるの心さへ起らず。

暗き影の中より二人の黒き姿が現はれた。透し見る、二人は肩の磨れ合ふまでに身

を寄り添へて歩るく、一歩は一歩より遲く、忽ち二個の姿一個に合ひし如くに自分には見えたが、又た二個に分れて頂きの平地に並んで立に及び、二人は月に向ひ暫く無言の體。

『だつて田舍よりか如何しても東京の方が可いでしよう。』といふ君子の聲。

『さうです、都會に住む人は惡魔になり、田舍の者は悉く善人だといふ譯は決してないけれど、私のやうな人間には如何しても田舍の方が可いやうです。近いところが都會に居てはこんな山もなければ、こんな見晴らしもありません。全くないではないが、田舍に住んで心閑かに眺めると、都會に居て名利競爭の暇に賞美するのとは全然精神が違ふやうです。』『さうですかねえ。』『然し理窟を言へば何でも議論は出來ますが、私は理窟は如何でも可いので、たゞ田舍が好き、それで文句はないのです。たゞ思ひます、田舍の好きな人は都會の好きな人よりか幸福だと、さう思ひます……どうせ人は皆な死んで了うのですからねえ……』『でも尾間さんは先の世が在ると仰しやいましたよ。』『尾間君などに何が解るものですか。』『マアあんなことを！』『眞實ですよ、彼の人なんか、神樣が如何だとか、かうだとか、木で作つて衣兜の中に納つてあるやうに手輕く神樣々々といひますがあれは皆な僞の皮ですよ。』『ジャ亦僞言者でしようか。』『マア僞言者でしようなア。』『ジャア未來は無いものでしようか。』『あるかも知れません、無いかも知れません。』『でも有るッて尾間さんは言ひましたよ。』『尾間君などは善人です。』『だつて貴樣今、僞言者だつて仰しやッたジャアありませんか。』『僞言者の善人は澤山ありますよ、傳道師などは大概さうのやうです。』『貴樣の仰しやることは私などに寸毫も解りません。』

然り、竊聽する自分にも解らない。謙輔は曾て自分にも同じやうなことを言ひ、亦た今、君子に向つて語る、其一語、其一句、好んで斯くもひねくるのか、さうでもないらしい。怪いかな彼！

『尾間君などは解るやうに言ひますが、あれで自分では何も解つて居ないのですよ。』

『大變惡く仰しやいますねえ。』『惡く言ふ譯じやない、私は全くさう信ずるのです。若し彼が解つて居るのなら、私は狂氣です。』と言ひ放つた謙輔の聲は甚く激して居た。

『そんなことは有りませんワ。』『いゝえ、狂氣です。けれども私は尾間君の善人よりか自分の狂氣の方を選びます。』

君子は默つて了つた。頭を垂れて立つ少女、傍に立つ一人は昂然として大空を見渡して居る。

『歸りましよう!。』

謙輔は靜かに前に立た。君子は其後に。先には並び歩いた二人が、今は前後して相隔つる二歩三歩、林に入り言葉もなく山を下りて了つた。

尾間とは新任の傳道師、彼如何にして二人の題目となつたか。自分の居ない間に、わが靜なる山家は、更らに一人の友を加へたのか。

自分は家に歸へり床に就たが、暫時は眠る能はず、君子とたゞ二人、長閑かに往來して暮らした彼日、彼時、色々と思ひ浮べて居ると、丘の麓を聲朗かに唄ひゆく、聲は正しくお鶴の兄、我が淨瑠璃の先生!

《六》

次の朝君子に會た。君子は奥の三疊でたゞ一人裁縫を仕て居た。自分を見て『お歸り、大變遲かつたのねえ。待つて居てよ。』『嘘言つてらア、待ても居ない癖に』と自分は其傍に坐つた。見ると見慣ぬ男の衣服を縫て居る。

『誰の?それは。』『これ?謙樣の。好い柄でしよう。そう〳〵言ひ遲れました、お土産有難う、私大變あの縞が氣に入たのよ。』『隨分長滯留だッたらう。』『眞實に長かつたワねえ、私待ち疲れて了つてよ』と言ひつゝ針を運して居る。其顏を見ると、血の氣は失せて、何處となく燋悴て見えるので『如何かしたの?顏色が惡いよ。』『そう?如何も仕ませんよ、昨夜何だか能く眠られなかつたからでしよう。』と顏を上げ頰に垂れた髮を搔あげて又た下を向いた。

『如何して？何處か悪いのじやアないの。』『武樣！』と君子は顔を上げ、笑味に耻を帶びて『私、昨夜妙な夢を見てよ。』

『謙輔先生のお嫁になつた夢でも見たの？。』と自分はツイ口を滑らした。君子はサッと顔を赤らめ『知らないワ！そんな夢じやアないワ！』『どんな夢？それぢやア。』『死んだ夢なの、死で地獄に陷ちた夢。何だか可畏つて可畏つて、赤鬼だの青鬼がぞろ〳〵居て、火の池に私を突き落して私が這ひ上らうとすれば又た突落すのよ。』と熱心に語る其眼の中に光あり、睫毛は潤んで居る。『そしてね、』と急に聲をひそめ向を見ると謙樣も居るのよ、謙樣が大きな聲て君さん〳〵早く逃ろ、早く逃ろッて言ひながら火の中に浮いたり沈んだり爲さるの……』『僕は居なかつて？僕は？。』

君子は頭を振て歎息をして『妙な夢でしよう。』

『僕が居たら直ぐ君さんを助けてやるんだけれど、謙樣なんか弱蟲だから駄目だ。』

『地獄なんて、眞實に有るものでしようか』と君子は何處までも眞面目である。

『有るかも知れないよ、耶蘇でも佛教でもさう言ふから。』『武樣眞實に如何思つて？。』

『どつちでも可いと思ふ。そんなことは如何でも可いじやアないか。君さんと一緒になら僕は地獄にでも行かア。』『私、否。』『極樂なら？』といふ自分の問に君子は答へず、急に起上つて次の間に出たと思ふと『武樣、謙樣が入ッしやッてよ……武樣も來て居ますから此處へお入りなさいナ。』

《七》

暫くすると尾間利雄も來た。自分が尾間に會ふは初て。君子は馴れ〳〵しく言葉を交へて居る。叔母の發案て、今日は小春の上日和、山遊に大勢で押出せといふに皆々贊成し、尾間に謙輔、自分に君子、謙輔の妹の春子、それに豊子と繁と同勢七人。叔母は下女下男と共に後から便當を運ぶといふ手配まで決り、河に沿ふた山、俗に赤山と呼ぶ低い平たひ、見晴の佳い丘へと繰り出した。

『御酒は先へ持て行たら？。』と出立際に叔母の注意。『酒は持ない方が可いでしよ

う。』と尾間の牧師。『イヤ持て行から、少でも持て徃かないと山遊の氣が仕ないから』と淺海謙輔の言葉に附いて『贊成、贊成！。』と自分は早くも叔母の手から例の一瓢を受取り擔いで了つた。尾間は見て苦笑した。

『讃美歌を持て行きましようか』と言つたのは君子、大贊成を表したのは尾間、自分も謙輔も默つて居た。

繁を先登に、これに續く春子豊子、男三人と君子とは後になり先になる。最後の下男の一人が藁莚と毛絨とを擔いで續く。

背の一番高いのが淺海謙輔、次が自分で、尾間は君子よりやゝ高い。尾間は二十六の由なれど小柄ゆゑ淺海の方が却て老けて見える。顔の一番白いのが君子で次ぎが尾間、自分の顔は分らないが、淺海と同じ黑さであらう。尾間は洋服を着て杖を持て居る、衣嚢を膨らし居るのは聖書か、それとも謙輔の所謂木で作つた手輕な神樣か。

淺海は飛白の羽織に米利堅帽、これは彼の常の衣裝らしい。君子は束髪にリボン、

其色が桃色、薔薇の花髪揷は見慣れぬ一物、多分淺海か尾間が贈つた品らしい。

『繁さん〳〵左樣走つては危ないよ。』と後を追ふて駈け出した豊子に從て春子の姿も小藪の曲角に隱れて了つた。

角まで來ると『ワッ』と三人。喫驚した顔で飛び上つた尾間の樣子が嫖輕だと君子は相顔を崩して笑ふ、自分も笑ふ、謙輔も笑ふ、笑ふや一、心持は異つて居たかも知れない。

『尾間樣、杖を拜借な』と君子は振り向く。

『何に爲さる？。』『何でも可いから借して頂戴な、』と言はれて尾間は大事さうに持て居た杖を渡す。自分達は如何するのかと見て居ると、君子はたゞそれを携へて行くのである。

麓を廻つて一丁ばかり、一軒の農家がある。小犬が吠へて飛び出した。ワッと三人の子供は後へ逃げ廻る、君子は杖を振り廻した。犬は益々吠へる。君子は遂に杖を犬

に投げつけると、犬は一躍、平氣な顔でそれをくはへ後の山へ上つて了つた。喫驚したのは尾間の牧師である。手早く上着を脱いで草の上に投げ出したトタンに衣兜から飛び出したのが聖書、アハヤ田溝に轉げ落ちさうにして僅に草の根に止つたのを見向もせず、一目算に犬の後を追駈けた。

浅海は腹を抱へて笑ふ、其際に自分は聖書を拾つて我が懐の奥に隠した。見たものは誰もない。

尾間が杖を取り返へすに十分もかゝつたらうか、上着を肩にかけたまゝズボンから眞白な手布を出して汗を拭きながら歩む、聖書のことは氣が着かぬらしい。

此一幕が終むと間もなく赤山に麓なる河岸に出た。川幅三四間、岸には川楊繁る。水は澄み底は小石の數も讀るべく、小舟一艘繋いであるのを見て、我年若き傳道師は逸早く飛び乘つた。其勢の餘り烈しかつたので、輕く繋ぎし綱拔けて舟はする／＼と一間ばかり沖へ。波紋ゆら／＼と起つて岸を打つ時、舟は止つて流緩るければ流れ

もせず、後へも先へも其儘尾間は流罪の體となつて了つた。

小供は手を拍つて山へと登りはじめる、浅海もこれに續ぎ、君子と自分は後に殘つたが二人の間は四五間隔たつて居たのである。

小舟には水棹なし、尾間は驚ろいたが如何することも出來ない、下男は爲に近所の家へ竹棹を借りに走る。自分は岸に立つて懐から先の聖書を取出し、故意と素知らぬ顔で繙いて讀む眞似をすると、尾間は見て、『オヤ驚いた、それは僕のジャアないですか』と急いで衣兜を捜したが、『不可せん／＼、それを見ちやア不可ません、布浦樣、武雄さん、眞當です、それを見ちやア不可ません。』と躍起になつて叫んだ。

『可いじやア有りませんか、秘密の本ジャア無いでしよう、先刻貴樣が落して御存知ないのを拾つて置いたのです。』と自分はたゞ揶揄ふ積りで益々聖書をひねくる。

『どうも有難う、然し／＼……、アヽ困つたなア』と其當惑さ加減は尋常でない。

浅海も不審に思つて足を止めて見て居る。

皮表紙四六版の聖書、それも手磨のした、流石に其職の人が持て居さうな古ぼけた書、別に不思議はないのである。君子が五歩六歩、自分の傍に近づいた時、表紙の裏に附てある紙挾の間から少し現はれて居る紙片に眼が着いた、其文字に。鉛筆て『愛する山の女神、君子の君に榮あれ!!!。』

自分はハタと書を閉ぢた時、君子は傍に來て『何ぞ書いて有るの?、お見せなさいな』『尾間樣!。』自分は呼びかけて『返しますよ、そら!。』と投げた。書は無事に彼の手へ。自分は走つて淺海の後を追ふた。七人、山に揃うた時、自分の素知らぬ風を見て、君子は勿論、淺海も、又た尾間すら文字を見た自分を怪しまなかつた。けれども一種、言ひがたき不快の念、それは前夜、君子の姿の見えなかつた時に感じたそれとは異つた、苦々しい、重苦しい思が自分の胸を壓へて山遊も一向に面白くない。けれども顏には少も出さなかつた。

一番面白ろさうなのが子供の次ぎには尾間牧師、次には君子、淺海も面白さうであるが、尾間ほどハシャいで居ない。君子はやゝ浮れ氣味で、地獄の夢など消えて跡なき夢物語。天國は近にありさうな樣子。

便當が來た、酒を出す、尾間は見向きも仕ない、淺海は二三杯、自分は五六杯、後は下男が飲て了つた。

松の小蔭に立てば冷しき風吹き、見渡せば野は半ば刈り取られ、廣びろと佳き眺めを面白いとも樂いともたゞ嬉しかつたのは以前の山遊、今は甚だ下らない。君子と尾間は聲を合はして讃美歌を歌つて居る。淺海は默つて聽て居る、自分は默つて見て居る。小供等は叔母や下男と戯れて居る。尾間のホワイトシャツは反射し、君子のリボンは飜へる。

此日、尾間と初めて相見て、此日より自分は尾間が嫌ひになつた。**そして淺海謙輔を何となく慕はしく思ひはじめたのは實に此日からである。**

（八）

山遊の日から五個月經つた。此短かい月日の間に如何なことが有つたか自分の口から言ふよりか淺海謙輔の筆の方が適切で而も意味が深いだらう。

春三月、謙輔は飄然として家を出で再び都に去つて了つたのである。自分すら其前夜まで知らなかつた、朝になつて見ると、謙輔が居ない、淺海の父母は、たゞ昨夜急に思ひ立て旅行の途に上つたとのみ、我々に告げた。實は父母すらそれが永久の門出たることを知なかつたのである。

けれども謙輔は途中から自分に一冊の隨筆を送り來した、自分は何度繰返へして讀だらう。

要するに彼は眞實の傳道者であつたと、自分は此處に斷言するのである。自分は彼に由て實に新らしき生命を得た。と言ふよりか寧ろ、彼に依て自分は眞實の生命に入る門を開かれたと自分は斷言する。

要するに彼は煩悶の兒である。自分も亦た彼に依て深い煩悶の淵に沈むこととなつ

た。けれども自分はこれを少も悔いないのである。

彼の名は今以て世間に聞えない。恐らく永久に聞えないだらう、けれども初より社會生存を無視したる彼には當然の事で、彼は勿論、自分とても敢て苦にもしないのである。

『惡魔』は我山林生活に於ける彼の隨筆。かれ自から題して『惡魔』と書し、自分に送つたのである。

其序文に曰く――武雄君足下、此一冊を君が机下に呈す。これ余が隨筆なり、月日なき日記なり、小説なり、演説なり、祈禱なり、咒咀なり、而て實に懺悔なり。過し半年の永かりしことよ！、此間、余が君の親切に負ふ所如何に多かりしやを思ふ時、この冊子を示して可なる人、君に非ずして遂に誰ぞ。

今日まで、君は忍んで余が苦悶の聲を聞き給ひぬ、願くは今一度我ために忍んで此冊子を一讀せよ。讀み了つて火中に投ずるも余に於て憾なし、藏して永く不幸なる青